

子どもの生活と声 1500 人アンケート最終報告 ～ひとりひとり、1/1 の生活と声に向き合って～

生活費をあまり、市立の看護学校に通っています。給付金が充実して、経済的にあれば、本当は、大学に行きたかったんです。今回給付金を支給していただき、本当にありがとうございました。給付金を頂いたことで不安が少しへりました。このような制度があること、頂けたことに感謝しております。給付金が頂けると聞いたとき少し安心しました。これから乗る自転車や、学生用品などが買えて、不安が無くなりました。本当にありがとうございました。給付金は学費に使わせてもらってとても感謝しています。高校に入り電車通学をしています。高校は通学定期代にしました、ありがとうございます。高校ではバイトをやろうと考えていましたが、サッカー部に入り、小学校から続けている、サッカーを続けることにしました。毎日部活動をし、充実した

2018年6月

公益財団法人あすのば

子どもの生活と声 1500 人アンケート最終報告にあたって

本報告書は、2017 年度にあすのばが行った「子どもの生活と声 1500 人アンケート」の調査結果に基づき、さらなる分析と考察を行ったものです。子どもの生活と声 1500 人アンケートは 2017 年春に「あすのば入学・新生活応援給付金」を届けた小学生～大学生世代までの子どもと保護者にご協力をお願いし、全国 1500 人以上にご協力いただきました。

2018 年 2 月に行った中間報告では調査結果から経済的な生活状況や抱える困りごと、そして、子どもたちや保護者の切実な声が明らかとなりました。「子どもの貧困対策法」の成立から 5 年を迎えるなか、アンケート調査にご協力いただいた方々はじめ、すべての子どもや保護者にとって「良かった」と思える対策をさらに前へすすめるため、研究者・実践者・学生世代で構成される検討会では議論を積み重ねてきました。また、最終報告へ向けた分析・考察にあたって日本アイ・ビー・エム株式会社さまに社会貢献活動として多大なるご支援をいただきました。

アンケートにご協力いただいた皆さま、調査結果の分析・考察にご支援・ご協力いただいた皆さま、中間報告書および本報告書に関心を持ってお読みいただいた皆さまに心から御礼を申し上げます。今回の調査結果と分析・考察結果が広くこの課題に関するさらなる理解を深め、子どもの貧困がなくなる社会へ向けて大きな一歩につながることを切に願っています。

子どもの生活と声 1500 人アンケート 検討会（敬称略、五十音順）

- | | |
|----------------|--|
| 末富 芳 | 検討会座長、日本大学 文理学部教育学科 教授、
内閣府子供の貧困対策に関する有識者会議 委員 |
| 武田 莉佳 | 慶應義塾大学 1 年生 |
| 直島 克樹 | 川崎医療福祉大学 医療福祉学部医療福祉学科 講師、
こどもを主体とした地域づくりネットワークおかやま 代表 |
| 中山 真珠 | 神戸市外国語大学 4 年、特定非営利活動法人地域支援センター |
| 橋詰 明香里 | 就実大学 3 年、あしなが学生募金事務局 |
| 花澤 昂乃 | 慶應義塾大学 3 年、学生団体 MOP 共同代表 |
| 柊澤 利也 | 早稲田大学 大学院教育学研究科 博士後期課程 |
| 深掘 麻菜香 | 北海道情報大学 2 年、NPO 法人 Kacotam ボランティア |
| 村尾 政樹 | あすのば事務局長、札幌市子ども・子育て会議臨時委員 |
| 門馬 優 | NPO 法人 TEDIC 代表理事、石巻市子ども・子育て会議委員
(協力) |
| 赤尾 広明 | 日本アイ・ビー・エム株式会社
(OB 参加) |
| 三宅 正太 | 元あすのば子どもサポーター
(分析協力) |
| 日本アイ・ビー・エム株式会社 | 社会貢献 |

一言で子どもの貧困といっても多様である。

ふたり親でも大変な家庭はあるし、
祖父母が育てている家庭もある。

多子で大変な家庭もあるし、
父子家庭も忘れてはいけない。

乳幼児の頃から大変な家庭もあるし、
大きくなってから大変になった家庭も。

施設で育った子どもだけでなく、
里親で育った子どももいる。

都市部だけでなく、地方にもいる。
進学だけでなく、就職した子どもも。

子どもの貧困対策のネクストステージは
すべての子どもたちのために。
そして、すべての人たちとともに。

子どもの生活と声 1500 人アンケート最終報告

目 次

子どもの生活と声 1500 人アンケートの概要・・・	1
----------------------------	---

子どもの生活と声 1500 人アンケートから見てきたこと・・・	3
---------------------------------	---

「子どもの生活と声 1500 人アンケート」結果（中間報告・概要抜粋）・・・	5
--	---

- 1、入学・新生活応援給付金について・・・ 5
- 2、「貧」軸（経済的な状況について）・・・ 7
- 3、「困」軸（困りごとについて）・・・ 10
- 4、制度の利用状況について・・・ 16
- 5、特に改善や充実してほしい支援や制度・・・ 17

「子どもの生活と声 1500 人アンケート」分析・・・	18
-----------------------------	----

- 1、貧困状態のパターンとその多様性（クラスター分析）・・・ 18
- 2、子どもの生活と声の聴き取り（子どもの声聴き取りパイロット調査）・・・ 24
- 3、自由記述（抜粋）・・・ 35

「子どもの生活と声 1500 人アンケート」考察・・・	42
-----------------------------	----

- ・ 検討会メンバー（検討会座長）の考察・・・ 42
- ・ 検討会メンバーからのコメント・・・ 43
- ・ 検討会メンバー（調査・研究担当）の考察・・・ 47
- ・ 【参考資料】これまでの検討会で話し合われたこと・・・ 48

子どもの生活と声 1500 人アンケートの概要

- (1) アンケート対象 2016 年度に「あすのば入学・新生活応援給付金」を届けた住民税非課税世帯・生活保護世帯・社会的養護のもとで暮らした経験のある、子ども本人（高校・大学 1 年世代）と保護者（社会的養護を除いた小学～大学 1 年世代）
- (2) 対 象 者 数 子ども票 1425 人、保護者票 1770 人（世帯）、合計 3195 票
- (3) アンケート方法 郵送法
- (4) 有 効 回 答 数 子ども票 547 票（有効回答率 38.4%）
保護者票 959 票（有効回答率 54.1%）
合 計 1506 票（有効回答率 47.1%）
- (5) 調 査 期 間 2017 年 10 月 31 日から 12 月 18 日まで
- (6) 協 力 者 の 概 況

<保護者（959 人・世帯）>

- ・ 母親 853 人（88.9%）、父親 61 人（6.4%）、祖父母 30 人（3.1%）、おじ・おば 5 人（0.5%）、その他・無回答が 10 人（1.0%）。平均年齢は 45 歳。
- ・ 世帯人数は平均 3.3 人で、中央値は 3 人。最小値は 2 人、最大値は 9 人。
- ・ 第一子の出産年齢は平均 26 歳で、20 歳未満で出産した世帯は 63 世帯（6.6%）、20 歳～24 歳は 294 世帯（30.7%）、25 歳～29 歳は 303 世帯（31.6%）、30 歳～34 歳は 190 世帯（19.8%）、35 歳以上は 69 世帯（7.2%）、無回答 40 世帯（4.1%）。
- ・ お住まいは北海道・東北地方 204 人（21.3%）、関東地方 174 人（18.1%）、中部地方 160 人（16.7%）、近畿地方 67 人（7.0%）、中国・四国地方 138 人（14.4%）、九州・沖縄地方 205 人（21.4%）、無回答 11 人（1.1%）。
(地方内訳) 北海道・東北地方：北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島
関東地方：茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川
中部地方：新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知
近畿地方：三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山
中国・四国地方：鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知
九州・沖縄地方：福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄
- ・ 子どもの暮らしてきた世帯の状況は、母子家庭 761 世帯（79.4%）、父子家庭 29 世帯（3.0%）、両親以外 22 世帯（2.3%）、両親がいる 107 世帯（11.2%）無効・無回答 40 世帯（4.1%）。生活保護世帯は 179 世帯（18.7%、無回答の割合含む）
- ・ 保護者が子どもの頃に暮らしてきた家庭の状況は、母子家庭 13.1%、父子家庭 3.8%、両親はいなかった 1.4%、両親がいた 78.4%、無効・無回答 3.3%。

<子ども（547 人）>

- ・ 高 1 世代 292 人（53.4%）、大 1 世代 247 人（45.2%）、無回答 8 人（1.5 人）
- ・ 性別は男性 255 人（46.6%）、女性 286 人（52.3%）、無回答 6 人（1.1%）
- ・ 現在、保護者と同居している人は 432 人（79.0%）、別居は 111 人（20.3%）

- ・暮らしてきた世帯の状況は、母子家庭 423 人 (77.3%)、父子家庭 23 人 (4.2%)、両親以外 16 人 (2.9%)、両親がいる 65 人 (11.9%)、無効・無回答 20 人 (3.7%)
- ・社会的養護経験者は 76 人 (13.9%、無回答の割合含む)。

(7) 留意点および集計方法

- ・アンケートは保護者票を「子どもの生活 1800 世帯アンケート」、子ども票を「子どもの声 1400 人アンケート」の名称で実施し、有効回答数に基づき「子どもの生活と声 1500 人アンケート」として報告書にまとめている。
- ・報告における集計は基本的に無効回答、無回答も含む集計・割合である。
 <無効回答の例：単一回答の質問に複数回答した場合など>
- ・保護者票の世帯収入および子ども票のアルバイトは、協力者が手当 1 回分を 1 ヶ月あたりと捉えて記入した、1 日の労働時間を週の労働時間と捉えて記入したと考えられるものなどは一部修正し集計をした。
 <修正の例：児童手当 1 回 10,000 円→1 回 40,000 円 (10,000 円×4 ヶ月分)>
 <修正の例：1 週間に 5 日、1 日 40 時間→1 週間に 5 日、1 日 8 時間>
- ・世帯人数は、最低 2 人として捉えて、2 人未満の記入は 2 人として集計をした。
 <保護者票 質問 9：あなたと給付金を受け取った一番上のお子さん含めて 人>
- ・端数処理の関係上、割合の合計が 100%に一致しないことがある。

(8) 「あすのば入学・新生活応援給付金」概要

- ・2016 年度に実施した「あすのば入学・新生活応援給付金」には 3,263 人の申込みがあり、うち該当は 3,050 人、非該当は 213 人だった。
- ・該当の 3,050 人から採用した 2,257 人の世代内訳は小学生 327 人、中学生 486 人、高校生 755 人、大学生 689 人である。
- ・審査基準は、子どもの扶養人数や新生活の予定など含め、総合的により経済的に厳しい家庭と社会的養護退所予定者から採用している。従って、貧困状態にある家庭や若者を想定しているが、必ずしも貧困線以下の暮らしや各制度の定義とは一致しない。
- ・全国の対象者母数は約 60 万人と推計される。

参考：総務省統計局の人口推計（平成 30 年 1 月 22 日公表）

0 歳～19 歳 全人口 (21,656,000 人)

対象 4 学年 (4,331,200 人) ※0 歳～19 歳 全人口 ÷ 20 × 4

4,331,200 人 × 子どもの相対的貧困率 13.9% = 602,037 人

子どもの生活と声 1500 人アンケートから見えてきたこと

【調査結果 主な発見 ～全体的な傾向～】

<貧軸（経済的な状況について）>

- 勤労月収 114,000 円、86%は年間 300 万円未満で生活 九州・沖縄地方は 91%＜P7, 8＞
- 高 1 の 3 人に 1 人はアルバイト 使い道は学校の費用 33% 家庭の生活費 15%＜P8＞
- 家庭の 52%は貯金なし、65%は子どもが小学生の頃までに経済的に厳しい状況＜P9＞

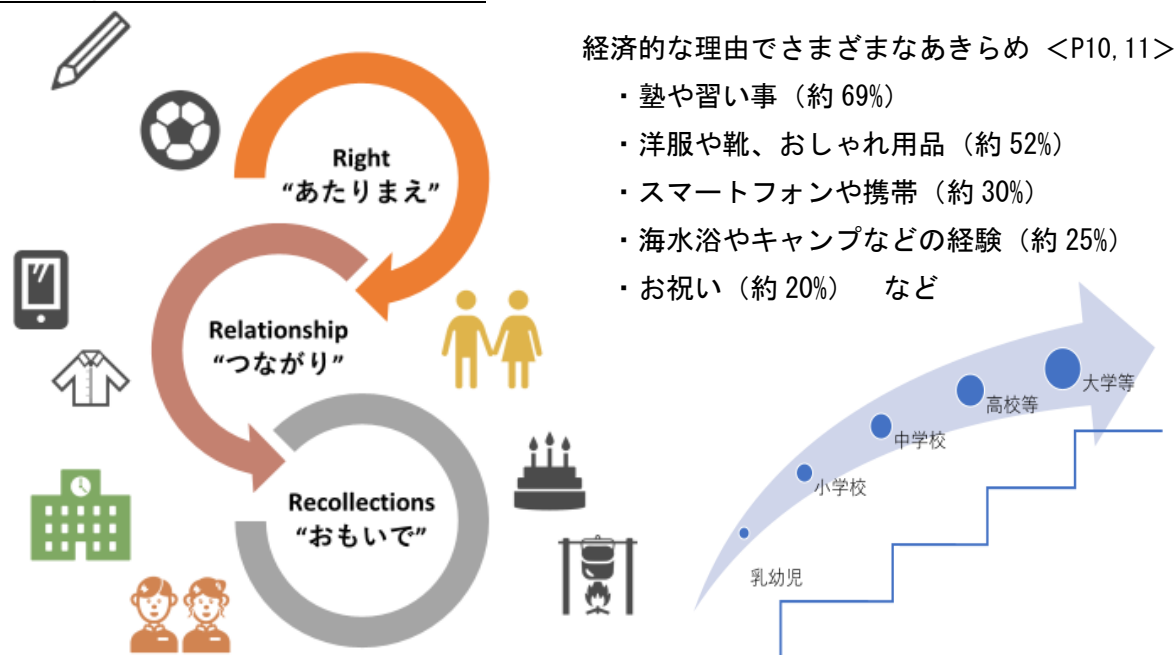
<困軸（困りごとについて）>

- 経済的な理由で塾・習い事を 69%の世帯が断念 乳幼児の頃から厳しい 75%＜P10＞
- 保護者と子どもの学校との関係「悪い」7% 子ども 19%は学校を居場所と思っていない＜P12, 13＞
- 保護者の 41%は健康状態が悪くなく、生活保護世帯では 63%と全体より高い＜P14＞

<給付金の機能や制度利用状況、支援ニーズ>

- 入学・新生活の前・直後にもらえる給付金は多様なニーズに応える“万能薬”＜P5, 6＞
- 就学援助の利用は 65% 高校生等奨学給付金の利用は 61%にとどまる＜P16＞
- 教育費用の軽減や安心して暮らせる経済的な支援へのニーズが高い＜P17＞

<子どもたちにとっての 3 つの “R” >



幼少期の頃から厳しい状況が続いていると… <P12, 13>

○さまざまなあきらめを積み重ねている

- <塾や習い事>乳幼児の頃から厳しい（約 75%）
- <洋服・靴など>小学生の頃から厳しい（約 66%）

○保護者と子どもの学校との関係（悪い）

- ・小学生の頃から厳しい（約 6%）
- 乳幼児の頃から厳しい（約 10%）

○自分の居場所と思うか（そう思わない）

- <学校>小学生の頃から厳しい（約 24%）
- <地域>乳幼児の頃から厳しい（約 23%）

【分析結果 主な発見 ～貧困状態のパターンとその多様性～】

互いに似た性質を持つものを集め、対象を分類するクラスター分析を行った（P18～）

○ふたり親で多子の家庭（構成比：約 8%）

～支援が少なく、支援の対象外に～



- ・ 1 ヶ月の手取りは 2 人で 153,000 円程度
- ・ 手当は児童手当のみ（月 25,000 円）
- （年）仕事 1,836,000 円 + 手当 300,000 円 = 2,136,000 円

○貧困状態が連鎖している家庭（構成比：約 12%）

～親が子どもの頃もひとり親家庭で育った～



- ・ 第一子の出産年齢が若年傾向
- ・ 家庭の貯金は、ほとんどない状態
- ・ 部活はあきらめてもらい、進路もあきらめ傾向

○ひとり親家庭①（構成比：約 18%）

～生活保護を利用せず、

非正規で働く母親～



- ・ 1 ヶ月の手取りは 97,000 円程度
- ・ 児童手当 1 回 80,000 円（月 20,000 円）
- 児童扶養手当約 212,000 円（月 53,000 円）
- （年）仕事 1,164,000 円 + 手当 876,000 円 = 2,040,000 円

○ひとり親家庭②（構成比：約 9%）

～ダブルワークで働いても、

これから先が心配～



- ・ 非正規でダブルワーク（月 105,000 円程度）
- ・ 年収は少しだけ貧困線を上回っている状態
- ・ 家庭の貯金は 50 万円近くわずかにある
- ・ 子どもが中学生の頃から厳しい状態

○生活保護家庭（構成比：約 7%）

～体調が良くなく働けない母親、

支援へのニーズも多い～



- ・ 生活保護を 6 年くらい利用している。
- ・ 健康状態が良くなく、働けない。
- ・ 全体的にあきらめ傾向やニーズが高い

実際はその他のパターン（P23）
や聴き取り（P24～）から、さらに
多様な貧困状態が想定できる。

「子どもの生活と声 1500 人アンケート」結果（中間報告・概要抜粋）

1、入学・新生活応援給付金について

（1）給付金がお役に立てた理由（給付金の機能 ①）

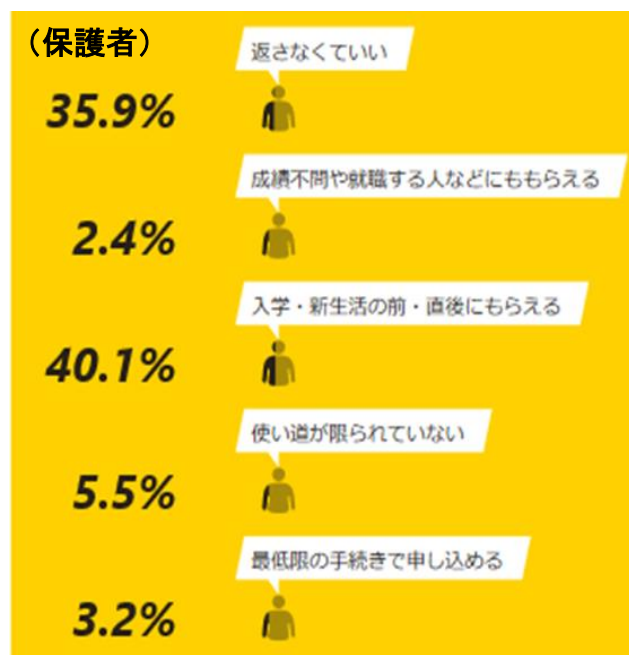
保護者・子どもともに、返さなくてもいい、入学・新生活の前・直後にももらえることが多い

給付金が「とても役に立った」・「役に立った」割合は、保護者（98.5%）、子ども（98%）だった。その理由について、保護者は①入学・新生活の前・直後にももらえる（約 40%）、②返さなくていい（約 36%）、子どもは①返さなくていい（約 48%）、②入学・新生活の前・直後にももらえる（約 26%）の順で役に立った理由を回答している（単一回答）。

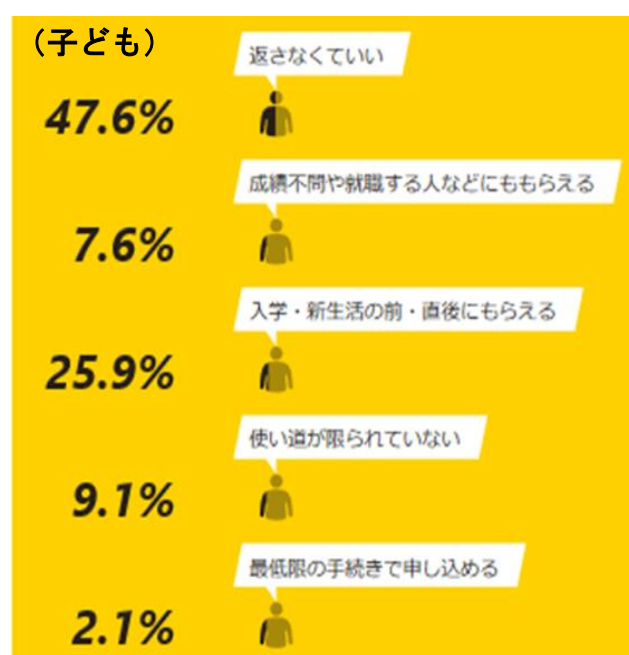
子どもは、保護者と比べて「使い道が限られていない（子ども 9.1%、保護者 5.5%）」、「成績不問や就職する人などにももらえる（子ども 7.6%、保護者 2.4%）」ことへの割合も高かった。「最低限の手続きで申し込める」は自由記述において感想があった。

このことから、就学援助の前倒し支給や、給付型奨学金は必要とする子どもたちの状況をくみとった包摂的な機能を持ち合わせる制度設計への期待も高いとも考えられる。

「すごく役に立った」、「役に立った」を選んだ人の理由（最もあてはまるもの 1 つ）



項目	回答数	割合
返さなくていい	339	35.9%
成績不問や就職する人などにももらえる	23	2.4%
入学・新生活の前・直後にももらえる	379	40.1%
使い道が限られていない	52	5.5%
最低限の手続きで申し込める	30	3.2%
その他	118	12.5%
無回答	4	0.4%
総計	945	100.0%



項目	回答数	割合
返さなくていい	255	47.6%
成績不問や就職する人などにももらえる	41	7.6%
入学・新生活の前・直後にももらえる	139	25.9%
使い道が限られていない	49	9.1%
最低限の手続きで申し込める	11	2.1%
その他	40	7.5%
無回答	1	0.2%
総計	536	100.0%

(2) 給付金の使い道（給付金の機能 ②）

制服や学用品、くつ、体操服・ジャージ、入学費用、部活動など多様な経済的ニーズに対応

給付金が役に立った理由は保護者・子どもともに「使い道が限られていない」ことが3番目に高かった。そこで、本報告では給付金（3万円～6万円）の具体的な使い道について、テキストマイニングを用いた分析を試みた。

その結果、制服（252件）や学用品（102件）、くつ（86件）、体操服・ジャージ（85件）、入学費用（82件）、部活動（72件）、カバン・バッグ（56件）、教科書（55件）、通学（49件）、スーツ（49件）、ランドセル（38件）、学費（31件）、自転車（31件）などのキーワードが多く検出された。他にも様々な使い道の回答があり、入学・新生活における多様な経済的ニーズが想定される。自由記述欄では多くの保護者から「想像以上にお金がかかった」という声も寄せられた。

このことから、子どもの貧困対策に特効薬はないと言われているが、使い道が限られていない現金給付が多様なニーズに応える“万能薬”であると考えられる。また、多額な入学関係費用や学校指定の制服や体操服などに加えて、かかると思っていなかったお金がかかる「ゴーストコスト（見えない費用）」が子どもたちや保護者の入学・新生活において不安の気持ちをさらに募らせているとも考えられる。

「入学・新生活応援給付金」はどのようにお使いになりましたか



ユーザーローカル テキストマイニングツール（<http://textmining.userlocal.jp/>）による分析

<入学・新生活応援給付金について、その他の発見>

「応援してくれる人がいることを感じ、励まされた（保護者 約 44%、子ども 約 32%）」、「不安が減り、気持ちが楽になった（保護者 約 37%、子ども 約 29%）」など、多くはお金意外の面でも意義があったと回答した（単一回答）。「特にお金意外の面で意義を感じなかった」は保護者が約 2%、子どもが約 7%。また、入学・新生活で他に利用した経済的な支援制度は保護者の約 74%が「ない」と回答した。子どもの約 50%は給付金を保護者などが申し込んでから知ったと回答した。

2、「貧」軸（経済的な状況について）

（1）回答いただいた世帯の収入と就労状況

勤労月収 114,000 円、世帯の約 86%は年間 3,000,000 円未満で生活 九州・沖縄は約 91%

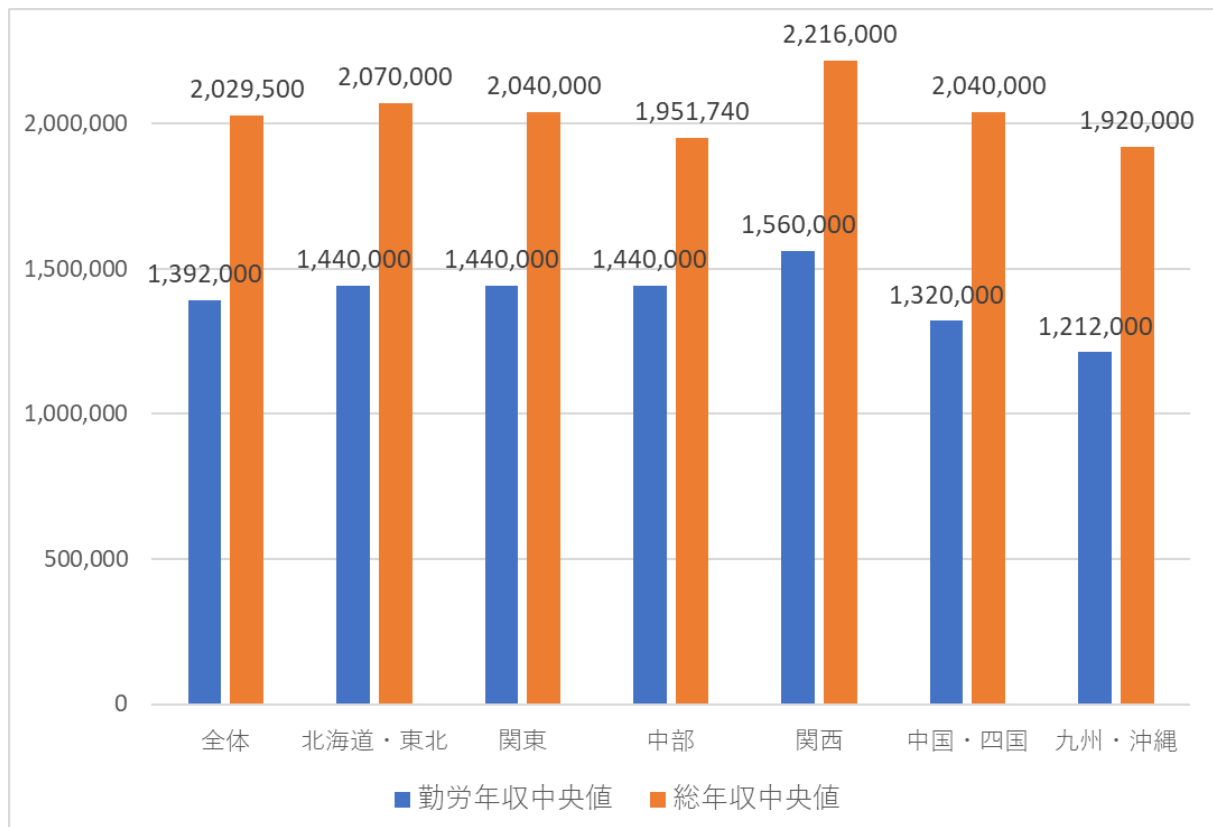
世帯の勤労年収中央値は手取りで 1,392,000 円、月の勤労月収中央値は手取りで 114,000 円だった。児童手当や児童扶養手当、生活保護など諸手当を含めた総年収中央値は 2,029,500 円だった。世帯の人数中央値は 3 人だったため、貧困線（2,110,000 円）以下の状態で生活している保護者や子どもたちの姿が改めて浮き彫りとなる。なお、総年収平均は 2,063,894 円で、「平成 28 年度全国ひとり親世帯等調査」における母子世帯の平均 3,480,000 円より低い結果となった。

総年収中央値の割合（n=890）について、200 万円未満は 435 世帯（約 49%）、200 万円代は 328 世帯（約 37%）、300 万円代は 87 世帯（約 10%）、400 万円以上は 40 世帯（約 5%）だった。九州・沖縄地方では 300 万円未満で暮らす世帯が約 91%（全国約 86%）と全国で一番高い状態だった。

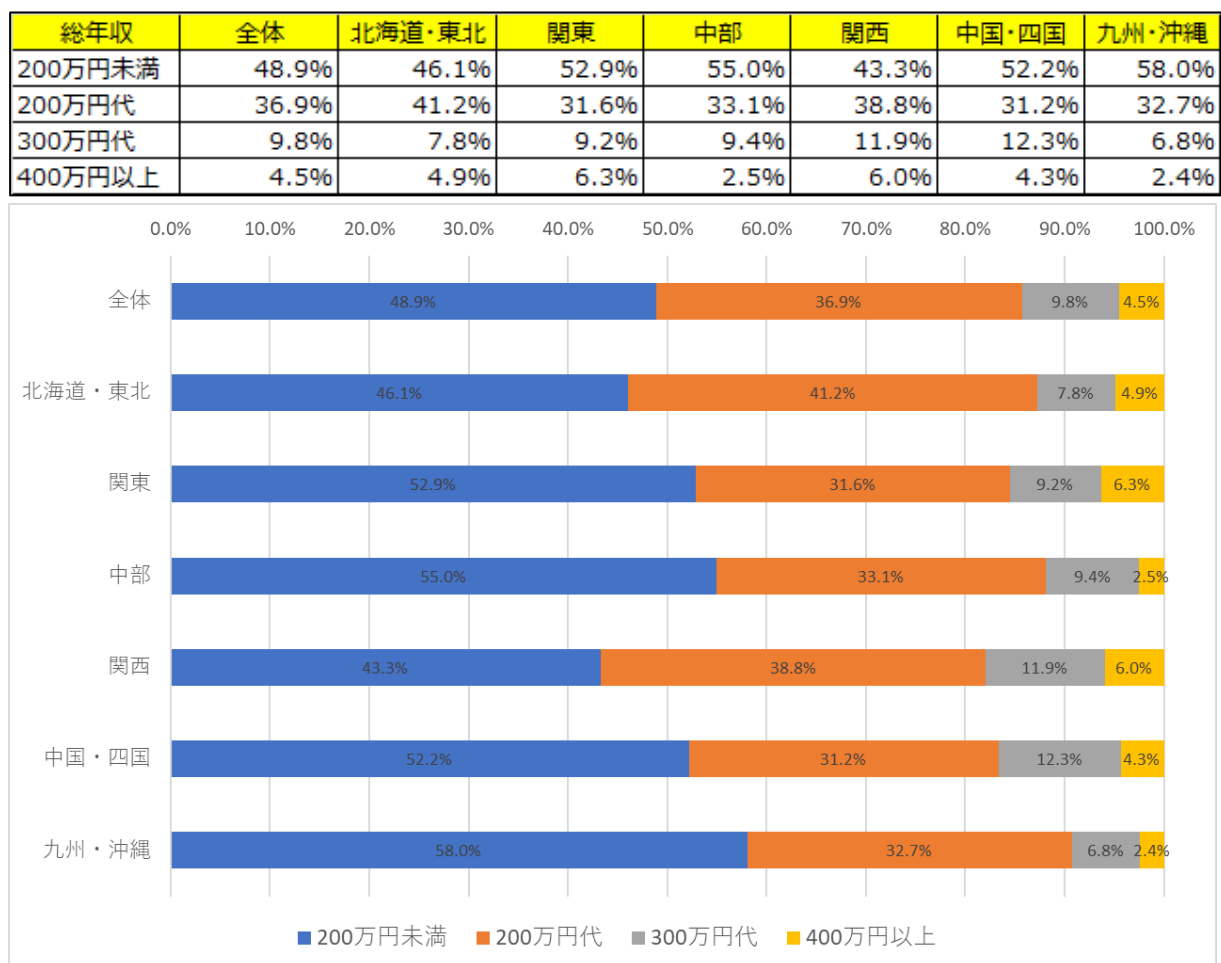
就業率は約 74%で、非正規雇用で仕事をしている人の割合は約 53%（正規雇用は約 22%、その他は約 17%）だった。仕事のかげもちをしている人は約 20%で、週の平均労働時間が 45 時間以上の人は約 20%だった。「現在、働ける状態ではない」と回答した人について、その理由は「保護者の健康状態が良くない（約 71%）」、「家族で介護や世話が必要な状態の人がいる（約 9%）」、「子どもの健康状態が良くない（約 4%）」だった。

勤労年収と総年収の地方ごと集計（年収は中央値、最低賃金は平均値）

項目	全体	北海道・東北	関東	中部	関西	中国・四国	九州・沖縄
勤労年収	1,392,000	1,440,000	1,440,000	1,440,000	1,560,000	1,320,000	1,212,000
総年収	2,029,500	2,070,000	2,040,000	1,951,740	2,216,000	2,040,000	1,920,000
最低賃金	848	755	862	802	829	760	744



総年収中央値の割合



(2) 子どものアルバイトの状況とアルバイト代の使い道

高1世代の3人に1人がアルバイトをはじめ、スマホ代や学校の費用、家庭の生活費にも
大1世代の4人に3人がアルバイトを経験し、学校の費用や4.5人に1人は家庭の生活費にも

高校1年世代（主に15歳または16歳）の約33%、大学1年生世代（主に18歳または19歳）の約75%がアルバイトの経験があると回答した。高1世代は週平均で約3日、1日あたり平均4.6時間の勤務をしている。大1世代は週平均で約4日、1日あたり平均5.2時間の勤務をしている。月々の平均アルバイト代は、高校1年世代が33,259円、大学1年世代が47,680円だった。

アルバイトの使い道について、高校1年世代は「スマートフォンや携帯代（約36%）」、「授業料や通学、昼食代、部活動など学校の費用（約33%）」、「家庭の生活費（約15%）」などで、大学1年世代は「授業料や通学、昼食代、部活動など学校の費用（約50%）」、「スマートフォンや携帯代（約32%）」、「家庭の生活費（約22%）」などだった（複数回答）。

アルバイト代の使い道はどれですか（あてはまるものすべて）

世代	学校の費用	卒業後の費用	家庭の生活費	スマホ・携帯代	おこづかい	貯金	その他
高校生世代	32.6%	15.8%	14.7%	35.8%	66.3%	40.0%	7.4%
大学生世代	50.3%	22.2%	21.6%	31.9%	63.8%	40.5%	5.4%

(3) いつぐらいから経済的に厳しい生活状況が続いているのか

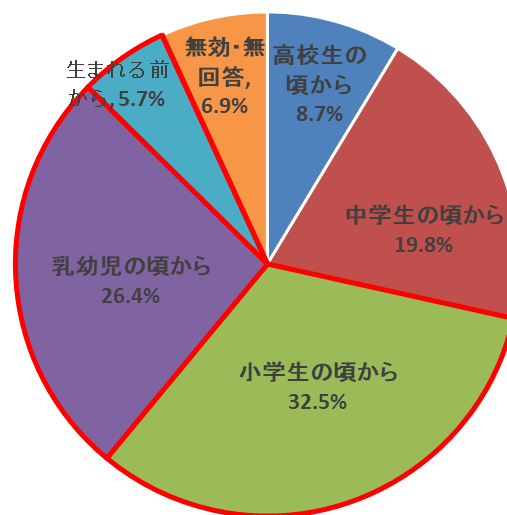
全世帯の約 65%は、子どもが小学生の頃までに経済的に厳しい生活状況となっている状態

いつぐらいから経済的に厳しい生活状況が続いているのかについて、約 9%は子どもが高校生の頃から、約 20%は中学生の頃から、約 33%は小学生の頃から、約 26%は乳幼児の頃から、約 6%は生まれる前からと回答した（2 人以上の場合は一番上の子ども。無効・無回答の割合含む）。

子ども票でも同様の質問をし、約 8%は高校生の頃から、約 24%は中学生の頃から、30%は小学生の頃から、約 13%は乳幼児の頃から、約 2%は生まれる前からと回答した（無効・無回答の割合含む）。いつぐらいから経済的に厳しい生活状況が続いているのか分らないは約 18%だった。

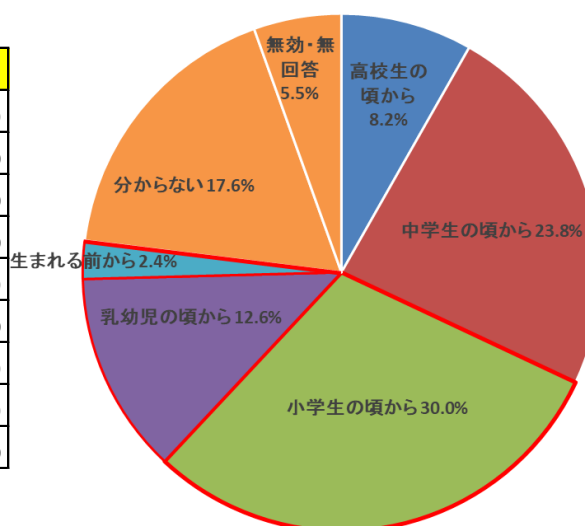
（保護者）

項目	回答数	割合
子どもが高校生の頃から	83	8.7%
子どもが中学生の頃から	190	19.8%
子どもが小学生の頃から	312	32.5%
子どもが乳幼児の頃から	253	26.4%
子どもが生まれる前から	55	5.7%
無効回答（複数回答）	2	0.2%
無回答	64	6.7%
総計	959	100.0%



（子ども）

項目	回答数	割合
高校生の頃から	45	8.2%
中学生の頃から	130	23.8%
小学生の頃から	164	30.0%
乳幼児の頃から	69	12.6%
生まれる前から	13	2.4%
分からない	96	17.6%
無効回答（複数回答）	5	0.9%
無回答	25	4.6%
総計	547	100.0%



(4) 家庭の貯金状況

全世帯の半数は貯金がない状態で、4 世帯中 3 世帯は貯金が 50 万円未満の状況で暮らしている

家庭の貯金状況について、約 52%は貯金がない、約 10%は 10 万円未満、約 14%は約 10 万円～50 万円未満、約 50 万円～100 万円未満は 7%と回答した（無回答の割合 7%含む）。100 万円以上は約 10%だった。「平成 28 年度全国ひとり親世帯等調査」では、母子世帯の貯金について 50 万円未満が約 40%だったことと比較しても高い割合となっており、給付金を受け取った家庭に貯金の面でも経済的な余裕がない状態が明らかとなった。

3、「困」軸（困りごとについて）

（1）今までに経済的な理由であきらめた経験

約 69%の世帯が塾・習い事を経済的な理由であきらめた経験、幼少期からの困窮で高い割合

保護者にうかがった子どもが今までに経済的な理由であきらめた経験について、①塾・習い事（約 69%）、②海水浴やキャンプなどの体験（約 25%）、③お祝い（約 20%）の順で回答が多かった。「平成 29 年度全国学力・学習状況調査」では小学生の約 46%、中学生の約 61%が塾に通っている。他にも部活動（約 14%）、進学・就職（約 12%）、病院への通院（約 10%）と、今の子どもたちの「あたりまえ」となりつつある塾・習い事や様々な経験が経済的な理由であきらめなければいけない状況にあることが明らかになった。

（保護者）今までに子どもが経済的な理由であきらめた経験（あてはまるものすべて）

項目	進学・就職	部活動	遠足・野外活動 など学校行事	塾・習い事	制服・スーツ	教科書・参考書
高校生の頃から	13	6	1	41	6	4
中学生の頃から	21	26	6	122	16	11
小学生の頃から	36	41	5	224	30	30
乳幼児の頃から	29	43	19	187	22	33
生まれる前から	6	13	3	39	9	5
無効回答	1	1	0	1	1	0
無回答	2	0	1	11	1	0
総計	108	130	35	625	85	83
割合（n=908）	11.9%	14.3%	3.9%	68.8%	9.4%	9.1%
項目	通学・通勤定期	病院への通院	お祝い	海水浴やキャン プなどの体験	その他	経済的な理由で あきらめた経験は ない
高校生の頃から	3	3	8	7	7	19
中学生の頃から	8	18	33	36	16	29
小学生の頃から	6	31	55	73	36	29
乳幼児の頃から	7	28	67	86	29	31
生まれる前から	5	4	19	24	13	4
無効回答	0	0	0	1	0	0
無回答	0	2	1	3	3	15
総計	29	86	183	230	104	127
割合（n=908）	3.2%	9.5%	20.2%	25.3%	11.5%	14.0%

また、あきらめた経験について、子どもがいつぐらいから経済的に厳しい状況が続いているかで比較したところ、中学生の頃より前から厳しい状況にある世帯の「あきらめ具合」が高いことが浮き彫りとなった。子どもが乳幼児の頃から経済的に厳しい状況にある世帯は、4 世帯に 3 世帯が塾や習い事をあきらめた経験がある結果となった。

項目	塾・習い事	割合	海水浴やキャン プなどの体験	割合	お祝い	割合
高校生の頃から	41	51.9%	7	8.9%	8	10.1%
中学生の頃から	122	65.9%	36	19.5%	33	17.8%
小学生の頃から	224	73.4%	73	23.9%	55	18.0%
乳幼児の頃から	187	74.8%	86	34.4%	67	26.8%
生まれる前から	39	72.2%	24	44.4%	19	35.2%

2人に1人は洋服や靴、おしゃれ用品をがまんし、5人に1人は勉強・進学意欲が減った

子どもにうかがった経済的にあきらめた経験について、①洋服や靴、おしゃれ用品などをがまんした（52%）、②スマートフォンや携帯を持つのをがまんした（約30%）、③学習塾に通うことができなかった（約29%）、④スポーツや習いごとができなかった（約27%）、⑤おこづかいやお年玉がもらえなかった（27%）、⑥勉強に対する意欲や進学への意気込みが減った（約21%）の順で回答が多かった。「そのようなことはとくにない」と回答したのは約17%で、いずれかに該当する割合は約83%だった。保護者と比べてより日常的なものへの「あきらめ具合」が高かった。

（子ども）過去に経済的な理由で次のようなことはありましたか（あてはまるものすべて）

項目	朝ご飯を食べなかった	学校でお弁当や昼食などではずかしい思いをした	夜ご飯をインスタント食品やファーストフードなどで済ませた	スポーツや習いごとなどができなかった	洋服や靴、おしゃれ用品などをがまんした	スマートフォンや携帯を持つのをがまんした
高校生の頃から	2	0	4	7	22	12
中学生の頃から	6	7	22	30	66	28
小学生の頃から	14	13	32	55	100	51
乳幼児の頃から	9	4	17	24	35	20
生まれる前から	2	0	2	4	7	6
分からない	3	2	9	10	19	22
無効回答	3	1	3	3	5	3
無回答	1	1	1	4	8	8
総計	40	28	90	137	262	150
割合（n=504）	7.9%	5.6%	17.9%	27.2%	52.0%	29.8%
項目	おこづかいやお年玉がもらえなかった	クリスマスプレゼントやお誕生日祝いなどがもらえなかった	海水浴やキャンプなどの体験ができなかった	体調不良のときに病院へ行くことをためらった	勉強に対する意欲や進学への意気込みが減った	希望した部活動をあきらめた
高校生の頃から	7	8	4	2	11	2
中学生の頃から	33	25	23	17	22	9
小学生の頃から	54	30	36	18	40	18
乳幼児の頃から	20	10	9	3	13	4
生まれる前から	3	2	3	0	4	2
分からない	14	6	7	6	10	4
無効回答	4	2	3	1	3	3
無回答	1	2	1	0	2	3
総計	136	85	86	47	105	45
割合（n=504）	27.0%	16.9%	17.1%	9.3%	20.8%	8.9%
項目	修学旅行や合宿などに参加できなかった	学習塾に通うことができなかった	退学・転校した（しよと考えている）	家計を助けるために進路を変更した、またはあきらめた	弟や妹のために進路を変更した、またはあきらめた	その他
高校生の頃から	1	10	0	5	0	1
中学生の頃から	5	37	1	14	2	1
小学生の頃から	6	60	6	21	2	4
乳幼児の頃から	2	19	1	14	2	2
生まれる前から	0	5	0	1	0	0
分からない	2	9	3	7	3	0
無効回答	2	2	1	5	1	2
無回答	1	2	1	3	1	0
総計	19	144	13	70	11	10
割合（n=504）	3.8%	28.6%	2.6%	13.9%	2.2%	2.0%

また、あきらめた経験について、いつぐらいから経済的に厳しい状況が続いているかで比較したところ、小学生の頃から厳しい状況が続いている子どもの「あきらめ具合」が高かった。

小学生の頃から厳しい状況にある子どもの洋服や靴、おしゃれ用品などをがまんした経験は全体の52%より約14ポイント高く、学習塾に通うことができなかった体験も全体の約29%より約11ポイント高かった。

項目	洋服や靴、おしゃれ用品などをがまんした	割合	スマートフォンや携帯を持つのをがまんした	割合	学習塾に通うことができなかった	割合
高校生の頃から	22	50.0%	12	27.3%	10	22.7%
中学生の頃から	66	54.1%	28	23.0%	37	30.3%
小学生の頃から	100	65.8%	51	33.6%	60	39.5%
乳幼児の頃から	35	51.5%	20	29.4%	19	27.9%
生まれる前から	7	53.8%	6	46.2%	5	38.5%
分からない	19	23.5%	22	27.2%	9	11.1%

(2) 周りとの関係や居場所に対する意識

保護者と子どもの学校との関係は、厳しい状況が続く期間に連れて「悪い」の割合が高い

保護者と子どもなど周りとの関係について、「良い」と「どちらかといえば良い」を合わせた回答の割合は、家庭・子ども（約93%）、子どもの学校（約88%）、過去含む職場（約73%）、地域・ご近所（約78%）、友人・知人（約86%）だった。

「悪い」と「どちらかといえば悪い」を合わせた回答の割合は、子どもの学校や過去含む職場、地域・ご近所との関係について、生まれる前や乳幼児の頃から厳しい状況が続く世帯の割合が他と比較して高かった。友人・知人との関係は、生まれる前や小学生の頃からの高かった。子どもの学校との関係は、厳しい状況が続く時期が幼くなるに連れて悪い割合が高くなっている。

（保護者）子どもなど周りとの関係

家庭・子ども	全体	高校生の頃から	中学生の頃から	小学生の頃から	乳幼児の頃から	生まれる前から	無効・無回答
良い・どちらかといえば良い	92.9%	92.8%	91.6%	94.9%	92.9%	92.7%	93.8%
悪い・どちらかといえば悪い	4.7%	3.6%	6.3%	4.5%	4.7%	5.5%	0.8%
無回答	2.4%	3.6%	2.1%	0.6%	2.4%	1.8%	5.5%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
子どもの学校	全体	高校生の頃から	中学生の頃から	小学生の頃から	乳幼児の頃から	生まれる前から	無効・無回答
良い・どちらかといえば良い	88.4%	94.0%	89.5%	90.7%	86.6%	81.8%	65.6%
悪い・どちらかといえば悪い	7.1%	1.2%	5.8%	6.4%	9.9%	14.5%	26.6%
無回答	4.5%	4.8%	4.7%	2.9%	3.6%	3.6%	7.8%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
職場（過去含）	全体	高校生の頃から	中学生の頃から	小学生の頃から	乳幼児の頃から	生まれる前から	無効・無回答
良い・どちらかといえば良い	72.8%	80.7%	71.1%	75.6%	70.8%	63.6%	84.4%
悪い・どちらかといえば悪い	15.2%	6.0%	16.3%	14.4%	19.4%	21.8%	3.1%
無回答	12.0%	13.3%	12.6%	9.9%	9.9%	14.5%	12.5%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
地域・ご近所	全体	高校生の頃から	中学生の頃から	小学生の頃から	乳幼児の頃から	生まれる前から	無効・無回答
良い・どちらかといえば良い	77.8%	83.1%	77.9%	81.7%	75.5%	65.5%	60.9%
悪い・どちらかといえば悪い	17.2%	12.0%	16.8%	14.7%	20.9%	30.9%	29.7%
無効・無回答	5.0%	4.8%	5.3%	3.5%	3.6%	3.6%	9.4%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
友人・知人	全体	高校生の頃から	中学生の頃から	小学生の頃から	乳幼児の頃から	生まれる前から	無効・無回答
良い・どちらかといえば良い	86.1%	89.2%	87.9%	87.2%	85.8%	80.0%	89.1%
悪い・どちらかといえば悪い	9.6%	6.0%	7.9%	10.6%	9.5%	16.4%	4.7%
無効・無回答	4.3%	4.8%	4.2%	2.2%	4.7%	3.6%	6.3%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

小学校から厳しい状況が続く子どものおよそ4人に1人が学校を居場所だと思っていない

子どもの居場所と思う場所について、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた回答の割合は、自分の部屋（約86%）、家庭（約87%）、学校（約78%）、職場（約36%※）、地域（約76%）、インターネット空間（約54%）だった（※職場について、アルバイト経験がある人のなかでは約55%だった）。「平成29年版子供・若者白書」と比較して、家庭（白書79.9%）、学校（白書49.2%）、職場（白書39.3%）、地域（白書58.5%）が白書より高く、自分の部屋（白書89%）とインターネット空間（約62%）が白書より低い結果となった。

学校について、「悪い」と「どちらかといえば悪い」を合わせた回答の割合は、乳幼児の頃からを除き、厳しい状況の時期が幼くなるに連れて高くなる傾向があり、小学校の頃から厳しい状況が続いている子どもはその割合が約24%だった。インターネット空間について、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた回答の割合は、厳しい状況の時期が幼くなるに連れて高くなる傾向があった。

（子ども）家庭や学校などを自分の居場所と思うか

自分の部屋	全体	高校生の頃から	中学生の頃から	小学生の頃から	乳幼児の頃から	生まれる前から	分からない	無効・無回答
そう思う・どちらかといえばそう思う	86.1%	88.9%	85.4%	85.4%	85.5%	84.6%	88.5%	90.0%
そう思わない・どちらかといえばそう思わない	11.0%	8.9%	12.3%	11.0%	11.6%	7.7%	9.4%	8.0%
無回答	2.9%	2.2%	2.3%	3.7%	2.9%	7.7%	2.1%	2.0%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
家庭	全体	高校生の頃から	中学生の頃から	小学生の頃から	乳幼児の頃から	生まれる前から	分からない	無効・無回答
そう思う・どちらかといえばそう思う	87.4%	88.9%	90.0%	89.6%	88.4%	84.6%	89.6%	56.0%
そう思わない・どちらかといえばそう思わない	9.7%	8.9%	7.7%	7.9%	8.7%	15.4%	9.4%	34.0%
無回答	2.9%	2.2%	2.3%	2.4%	2.9%	0.0%	1.0%	10.0%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
学校	全体	高校生の頃から	中学生の頃から	小学生の頃から	乳幼児の頃から	生まれる前から	分からない	無効・無回答
そう思う・どちらかといえばそう思う	77.5%	86.7%	84.6%	72.0%	82.6%	61.5%	77.1%	60.0%
そう思わない・どちらかといえばそう思わない	18.8%	11.1%	13.1%	24.4%	15.9%	30.8%	20.8%	28.0%
無回答	3.7%	2.2%	2.3%	3.7%	1.4%	7.7%	2.1%	12.0%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
職場	全体	高校生の頃から	中学生の頃から	小学生の頃から	乳幼児の頃から	生まれる前から	分からない	無効・無回答
そう思う・どちらかといえばそう思う	36.4%	53.3%	37.7%	31.1%	37.7%	30.8%	43.8%	6.0%
そう思わない・どちらかといえばそう思わない	21.4%	26.7%	18.5%	25.0%	14.5%	30.8%	16.7%	44.0%
無効・無回答	42.2%	20.0%	43.8%	43.9%	47.8%	38.5%	39.6%	50.0%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
地域	全体	高校生の頃から	中学生の頃から	小学生の頃から	乳幼児の頃から	生まれる前から	分からない	無効・無回答
そう思う・どちらかといえばそう思う	76.2%	82.2%	78.5%	79.9%	69.6%	69.2%	78.1%	38.0%
そう思わない・どちらかといえばそう思わない	15.5%	13.3%	9.2%	14.0%	23.2%	15.4%	16.7%	52.0%
無効・無回答	8.2%	4.4%	12.3%	6.1%	7.2%	15.4%	5.2%	10.0%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
インターネット空間	全体	高校生の頃から	中学生の頃から	小学生の頃から	乳幼児の頃から	生まれる前から	分からない	無効・無回答
そう思う・どちらかといえばそう思う	54.3%	51.1%	52.3%	54.9%	55.1%	69.2%	57.3%	52.0%
そう思わない・どちらかといえばそう思わない	35.8%	42.2%	35.4%	34.8%	39.1%	15.4%	37.5%	26.0%
無回答	9.9%	6.7%	12.3%	10.4%	5.8%	15.4%	5.2%	22.0%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

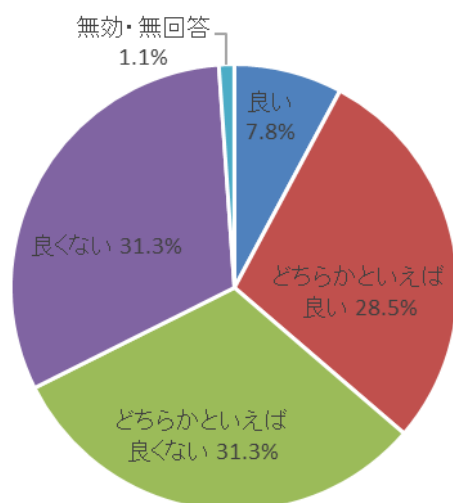
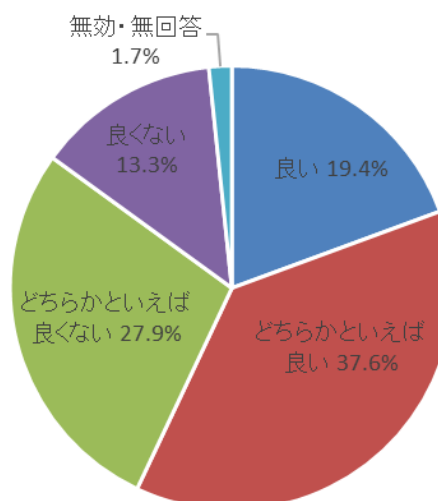
(3) 保護者の健康状態

約 41%は保護者の健康状態が良くない状態で、生活保護世帯は約 63%と全体より高い状態

保護者の健康状態について、「良くない」と「どちらかといえば良くない」を合わせた回答の割合は約 41%だった。生活保護世帯のみで集計すると約 63%となり、全体と比較して約 22 ポイント高い結果となっている。

(保護者) 保護者の健康状態

項目	回答数	割合
良い	186	19.4%
どちらかといえば良い	361	37.6%
どちらかといえば良くない	268	27.9%
良くない	128	13.3%
無効・無回答	16	1.7%
総計	959	100.0%



(保護者) 保護者の健康状態<生活保護>

項目	回答数	割合
良い	14	7.8%
どちらかといえば良い	51	28.5%
どちらかといえば良くない	56	31.3%
良くない	56	31.3%
無効・無回答	2	1.1%
総計	179	100.0%

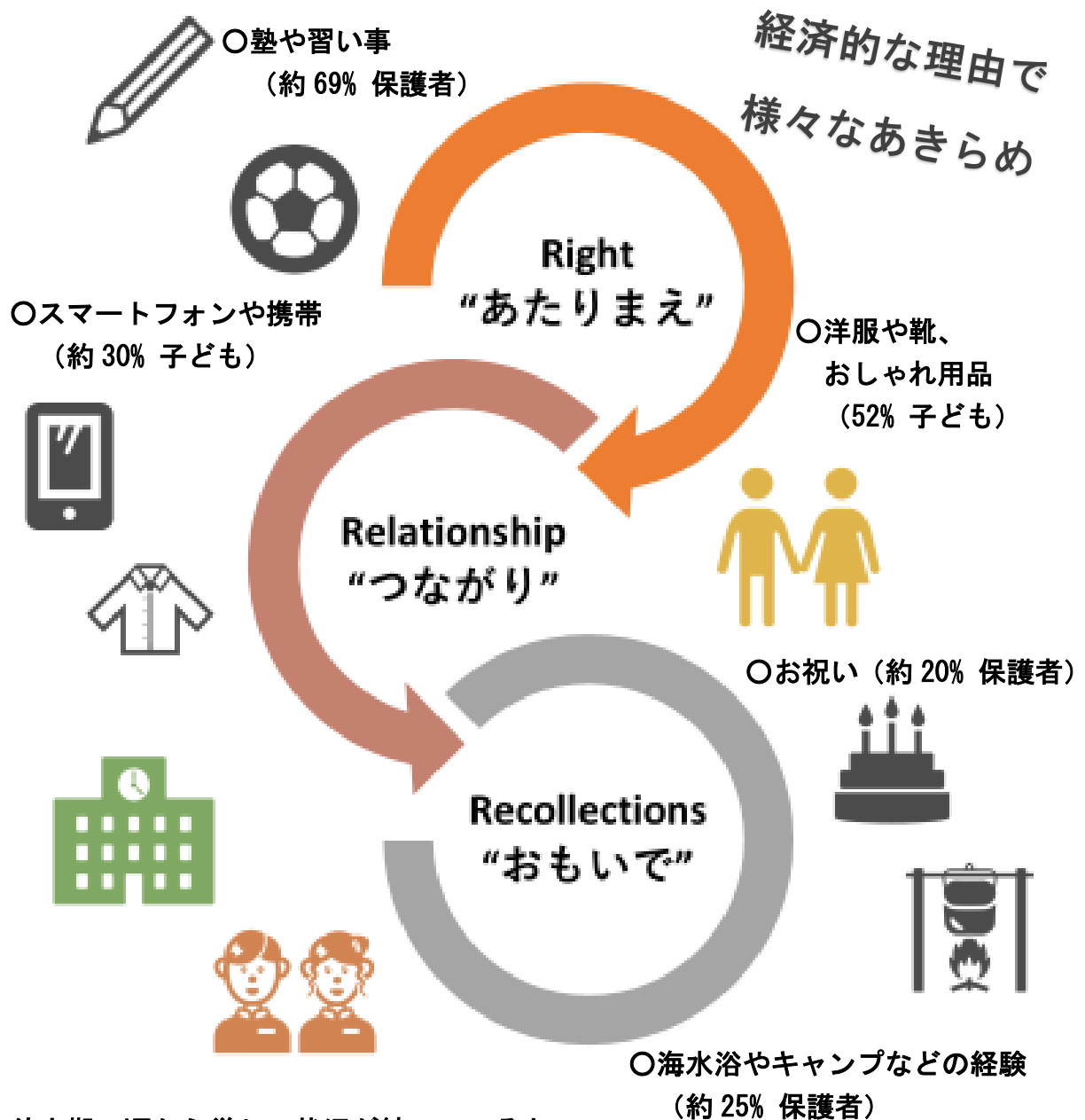
(4) 生活保護世帯や性別でのあきらめた経験の割合比較

生活保護世帯は進学・就職、部活動、海水浴やキャンプなどの体験などで差。男女にも差

生活保護世帯の経済的な理由であきらめた経験について、保護者にうかがった 10 項目のうち、「教科書・参考書」と「病院への通院」を除く 8 項目は生活保護を利用していない世帯より高い結果となった。5 ポイント以上の差があったのは、①進学・就職（生保 18.2%、生保なし 9.7%、ポイント差 8.4）、②部活動（生保 19.4%、生保なし 13.5%、ポイント差 5.9）、③海水浴やキャンプなどの体験（生保 30.3%、生保なし 25.2%、ポイント差 5.1）だった。

また、子どもにうかがった経済的な理由であきらめた経験について性別で比較すると、17 項目のうち「朝ご飯を食べなかった」、「スマートフォンや携帯を持つのをがまんした」、「おこづかいやお年玉をもらえなかった」、「家計を助けるために進路を変更した、またはあきらめた」を除いた 13 項目は女性のあきらめ具合が高かった。4 ポイント以上の差があったのは、①洋服や靴、おしゃれ用品などをがまんした（男 48.9%、女 54.2%、ポイント差 5.3）、②学校でお弁当や昼食などではずかしい思いをした（男 3.1%、女 7.7%、ポイント差 4.7）だった。

子どもたちにとっての、3つの“R”



幼少期の頃から厳しい状況が続いていると…

○様々なあきらめを積み重ねている

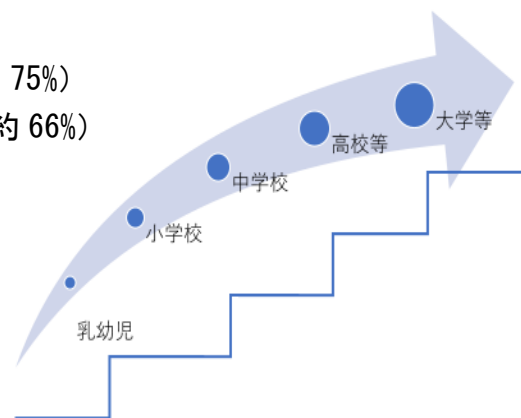
- ＜塾や習い事＞乳幼児の頃から厳しい (約 75%)
- ＜洋服・靴など＞小学生の頃から厳しい (約 66%)

○保護者と子どもの学校との関係 (悪い)

- ・小学生の頃から厳しい (約 6%)
- 乳幼児の頃から厳しい (約 10%)

○自分の居場所と思うか (そう思わない)

- ＜学校＞小学生の頃から厳しい (約 24%)
- ＜地域＞乳幼児の頃から厳しい (約 23%)



4、制度の利用状況について

(1) 就学援助の利用状況

利用は約 65%にとどまり、利用なしのうち 78%は利用の仕方が分からない・制度を知らない

保護者にうかがった制度の利用状況について、「利用中、利用したことがある」世帯は約 65%だった。利用がないと回答した世帯のうち、78%の世帯は「利用の仕方が分からなかった（16.6%）」、「支援制度自体を知らなかった（61.4%）」と回答した。

(保護者) 就学援助を利用したことがありますか

【就学援助】	回答数	割合
利用中、利用したことがある	627	65.4%
利用したいと思ったことがない	23	2.4%
利用したかったが、条件を満たしていなかった	23	2.4%
利用したかったが、使いづらかった	15	1.6%
利用の仕方が分からなかった	46	4.8%
支援制度自体を知らなかった	170	17.7%
無効回答	2	0.2%
無回答	53	5.5%
総計	959	100.0%

利用なし (n=277)	割合
利用したいと思ったことがない	8.3%
利用したかったが、条件を満たしていなかった	8.3%
利用したかったが、使いづらかった	5.4%
利用の仕方が分からなかった	16.6%
支援制度自体を知らなかった	61.4%



(2) 高校生等奨学給付金の利用状況

利用は 61%にとどまり、利用なしのうち約 64%は利用の仕方が分からない・制度を知らない

給付金を受け取った子どもが高校生以上の保護者にうかがった制度の利用状況について、「利用中、利用したことがある」世帯は 61%だった。利用がないと回答した世帯のうち、約 64%の世帯は「利用の仕方が分からなかった（13.8%）」、「支援制度自体を知らなかった（50.0%）」と回答した。

(保護者) 高校生等奨学給付金を利用したことがありますか<高以上の世帯のみ>

【高校生等奨学給付金】	回答数	割合
利用中、利用したことがある	356	61.0%
利用したいと思ったことがない	16	2.7%
利用したかったが、条件を満たしていなかった	35	6.0%
利用したかったが、使いづらかった	12	2.1%
利用の仕方が分からなかった	24	4.1%
支援制度自体を知らなかった	87	14.9%
無効回答	1	0.2%
無回答	53	9.1%
総計	584	100.0%

利用なし (n=174)	割合
利用したいと思ったことがない	9.2%
利用したかったが、条件を満たしていなかった	20.1%
利用したかったが、使いづらかった	6.9%
利用の仕方が分からなかった	13.8%
支援制度自体を知らなかった	50.0%



5、特に改善や充実してほしい支援や制度

保護者と子どもともに教育費用の軽減や、安心して暮らせる経済的な支援へのニーズが高い

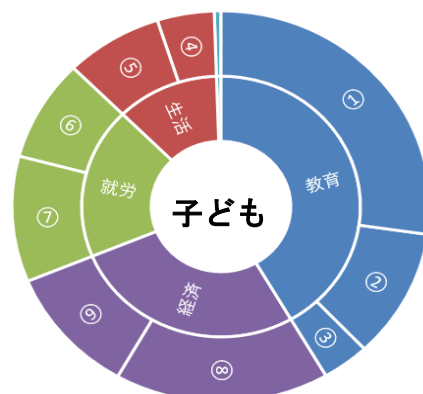
特に改善や充実してほしい支援や制度について、保護者・子どもともに教育支援と経済的支援が多かった。保護者は「①給付型奨学金や授業料免除など子どもにかかる教育や進学のコスト負担を減らしてほしい」(約80%)、「⑧安心して暮らすことのできる経済的な福祉制度が増えてほしい」(約66%)、「⑨支援の情報を分かりやすく届けてほしい、または手続きを簡単にしてほしい」(約59%)の順で割合が高かった。子どもは①(約76%)と⑧(約46%)の順番は同じで、3番目に高かった割合は「②無料の学習支援など勉強を教えてくれる支援が増えてほしい」(約30%)だった。

(保護者)

法律	支援や制度で、特に改善や充実してほしいことはありますか (あてはまる番号すべて)	割合 (n=927)
教育	①給付型奨学金や授業料減免など子どもにかかる教育や進学のコスト負担を減らしてほしい	79.9%
	②無料の学習支援など子どもに勉強を教えてくれる支援が増えてほしい	51.0%
	③海水浴やキャンプなど様々な体験のできる支援が増えてほしい	18.2%
生活	④放課後や夜間に子どもの面倒をみってくれる場所が増えてほしい	17.7%
	⑤困ったときに気軽に相談できる相手や支援者が増えてほしい	32.0%
就労	⑥就労するときにサポートしてくれる支援が増えてほしい	27.2%
	⑦無理をせず安定して働くことのできる労働環境がほしい	47.1%
経済	⑧安心して暮らすことのできる経済的な福祉制度が増えてほしい	65.5%
	⑨支援の情報を分かりやすく届けてほしい、または手続きを簡単にしてほしい	58.7%
その他	⑩その他	2.6%

(子ども)

法律	支援や制度で、特に改善や充実してほしいことはありますか (あてはまる番号すべて)	割合 (n=479)
教育	①給付型奨学金や授業料減免など教育や進学のコスト負担を減らしてほしい	76.2%
	②無料の学習支援など勉強を教えてくれる支援が増えてほしい	29.9%
	③海水浴やキャンプなど様々な体験のできる支援が増えてほしい	10.2%
生活	④放課後や夜間に子ども一人で行って過ごせる場所が増えてほしい	12.3%
	⑤困ったときに気軽に相談できる相手や支援者が増えてほしい	21.1%
就労	⑥就労するときにサポートしてくれる支援が増えてほしい	23.4%
	⑦無理をせず安定して働くことのできる労働環境がほしい	29.0%
経済	⑧安心して暮らすことのできる経済的な福祉制度が増えてほしい	46.3%
	⑨支援の情報を分かりやすく届けてほしい、または手続きを簡単にしてほしい	29.4%
その他	⑩その他	1.5%



「子どもの生活と声 1500 人アンケート」分析

1、貧困状態のパターンとその多様性（クラスター分析）

中間報告では調査結果から全体的な傾向が明らかになったが、本報告では互いに似た性質を持つものを集め、対象を分類するクラスター分析を行い、貧困状態のパターンとその多様性の解明を試みた。分析にあたっては日本アイ・ビー・エム株式会社にも社会貢献活動としてご支援いただき、非階層的方法を用いて分析を行った。その結果、貧困状態にある保護者は 10 パターンに分類され、本報告では特徴的な 5 パターンについて主に紹介する。なお、それぞれのパターンのなかでもとくに典型的な家庭像（ペルソナ像）を取り上げる。

(1)「ふたり親で多子の家庭 ～支援が少なく、既存の制度の対象外に～」

<家族の概況>

- ・今回、給付金を受け取ったのは小学校に入学した子ども（7 歳、末っ子）。
- ・ふたり親で、地方に在住。回答した保護者は 43 歳。
- ・子どもは給付金を受け取った子ども含めて 3 人。
- ・第一子は高校生、第二子は中学生の 5 人家族。
- ・第一子は保護者が 26 歳のときに生まれた。



<経済的な状況（「貧」軸）>

- ・保護者は共働きだが、ふたりとも非正規の仕事。
- ・1 ヶ月の手取りはふたり合わせて 153,000 円程度。
- ・手当は児童手当のみ。4 ヶ月に 1 回、100,000 円（月額 25,000 円、2 月・6 月・10 月に支給）→仕事で年間 1,836,000 円程度、手当で年間 300,000 円。年収合計 2,136,000 円。

（5 人家族の貧困線は約 2,720,000 円）

- ・家庭の貯金は 50 万円未満。
- ・第一子が幼い頃から経済的に厳しい状態が続いている。

<困りごと、悩んでいること（「困」軸）>

- ・今まで経済的な理由で塾や習い事を子どもにさせてあげられなかった。
- ・子どもの通院をためらったことも。海水浴やキャンプなどの体験も十分にできなかった。
- ・特に教育や進学にかかる費用負担を減らしてほしいと思っている。
- ・困ったときに気軽に相談できる相手や支援者、また、就労支援も増えてほしい。
- ・支援情報を分かりやすく届けてほしい。手続きもできる限り簡単にしてほしい。

夫は障害を抱えていて、現在、非正規で働いています。支援を受けようと思いますが、あてはまることはありません。非正規の仕事で働きすぎると、税金のことを考えると、かえって収入が減る気がしてしまいます。収入が多いと就学援助などの支援を受けられなくなることも不安です。ニュースや新聞では、東京などで無料の学習支援教室があり、そこで勉強している姿の子どもたちを見た事がありますが、田舎にいればいるほど、子どもに勉強など力をつけさせたいと思っても、そういう支援や制度がありません。保育園や学童保育以外にも、核家族や共働きを支える支援や制度をつくってほしいです。＜アンケート自由記述より＞

構成比率：75 人（約 8%）

(2)「貧困状態が連鎖している家庭 ～親が子どもの頃もひとり親家庭で育った～」

<家族の概況>

- ・ 給付金を受け取ったのは中学に入学した子ども（13歳）。
- ・ ひとり親で母子家庭。保護者は39歳。
- ・ 給付金を受け取った子どもの上に中3の子どもがいる。
- ・ 第一子は保護者が24歳のときに生まれた。
- ・ 給付金は成績不問だったこともありがたかった。
- ・ 不安の気持ちが減って、気持ちが楽になった。



<経済的な状況（「貧」軸）>

- ・ 非正規で働いている。1ヶ月の手取りは80,000円程度。
- ・ 手当は児童手当と児童扶養手当。
児童手当：4ヶ月に1回、80,000円（月額20,000円、2月・6月・10月に支給）
児童扶養手当：4ヶ月に1回、約212,000円（月額約53,000円、4月・8月・12月に支給）
→生活保護で年間960,000円程度、児童手当240,000円、児童扶養手当636,000円
年収合計1,836,000円（3人家族の貧困線は約2,110,000円）
- ・ 家庭の貯金は、ほとんどない状態。
- ・ 第一子が幼い頃から経済的に厳しい状態が続いている。

<困りごと、悩んでいること（「困」軸）>

- ・ 保護者が子どもの頃もひとり親家庭で育った経験がある。
- ・ 部活動はあきらめてもらった。進学をあきらめてもらうことも考えている。
- ・ それでも、子どもの病院だけは行かせてあげられるようにしている。
- ・ 他の支援制度のことは知らないし、利用の仕方もよく分からなかった。
- ・ 子どもに勉強を教えてくれる場所やさまざまな体験、放課後の支援が増えてほしい。

現在ある支援や制度も、見つけられなければ利用も出来ません。支援や制度にどんなものがあるのか全然分からず、詳しく載っている一覧などがあると便利。

ただ、どこにどんな相談ができるのかも知らず、相談してその先の安定も想像できない。だから気軽に話せません。

また、私には身内に頼れる人がいません。市のひとり親の奨学金等借りようとする、保証人が必要になるものには一切申し込みが出来ません。

資格として「～の者、～の資格証を持っている者」と限定すると、その枠には自らの意思でない理由で入れない人が外されてしまうので、「原則は～の者」とか「～に準じる者」と、ゆるめてもらえたら助かる人も少なくないと思います。個々の事情をくみ取り、対応して頂けるようになったら良いのと思いました。

今回の給付金は、学校からのお手紙でこういう制度があることを初めて知りました。返さなくて良いNP0?とか正直あやしいのかなあというのがホンネでした。学校からのチラシでなければ、制度があっても信用しなかったかもしれません。＜アンケート自由記述より＞

構成比率：113人（約12%）

(3)「ひとり親家庭① ～生活保護を利用せず、貧困線未満の非正規で働く母親～」

<家族の概況>

- ・ 給付金を受け取ったのは中学校に入学した子ども（13 歳）。
- ・ ひとり親で母子家庭。保護者は 41 歳。
- ・ 子どもは給付金を受け取った子ども含めて 2 人。
- ・ 給付金を受け取った子どもの上に中 3 の子どもがいる。
- ・ 第一子は保護者が 26 歳のときに生まれた。
- ・ 給付金は入学・新生活の前にもらえて良かった。
- ・ お金以外でも応援してくれていることを感じ、励まされた。



<経済的な状況（「貧」軸）>

- ・ 非正規雇用で働いている。健康状態はどちらかといえば良い。
- ・ 1 週間に平均 30 時間程度。1 ヶ月の手取りは 97,000 円程度。
- ・ 手当は児童手当と児童扶養手当。養育費はない。
児童手当：4 ヶ月に 1 回、80,000 円（月額 20,000 円、2 月・6 月・10 月に支給）
児童扶養手当：4 ヶ月に 1 回、約 212,000 円（月額約 53,000 円、4 月・8 月・12 月に支給）
→ 仕事で年間 1,164,000 円程度、児童手当 240,000 円、児童扶養手当 636,000 円
年収合計 2,040,000 円（3 人家族の貧困線は約 2,110,000 円）
- ・ 家庭の貯金は、ほとんどない状態。
- ・ 第一子が幼い頃から経済的に厳しい状態が続いている。

<困りごと、悩んでいること（「困」軸）>

- ・ 保護者が子どもの頃は両親がいて、周りとの関係も比較的良い方。
- ・ 入学時に他の経済的支援制度があることを知らなかった。
- ・ 今まで経済的な理由で塾や習い事を子どもにさせてあげられなかった。
- ・ 海水浴やキャンプなどさまざまな体験ができる支援も増えてほしい。
- ・ 放課後や夜間に子どもの面倒をみてくれる場所が増えてほしい。
- ・ 就労支援や労働環境に対するニーズは他のパターンと比べて低い。

今はアパートに月 5 万円の家賃で住んでいます。市営住宅に申し込んでも当たらず、月に少しでも家賃補助が欲しいです。子ども 2 人は食べざかりで、光熱費も高く、子どもが大きくなるにつれて学用品や部活動などの費用も増えました。制服やシューズもサイズが合わなくなるのが心配です。

母子家庭だと稼ぐにも限界があります。一番不安なのは自分が体調を崩した時のことです。現に 1 週間ケガをして休みました。子どもの世話をしてくれる人もいないので、本当に不安で困りました。子どもが小さい頃は本当に大変でした。

高校や大学は今よりお金がかかると聞きました。進学を希望しているのに、親の経済的理由で諦めないとはいけないのはとてもつらいです。でも奨学金だと、子どもが就職した時に借金があると、頑張って働く意欲がなくなるんじゃないかと心配です。塾に行かせたいし、本人も行きたがってますけど、経済面でなかなか行かせてあげられません。＜アンケート自由記述より＞

構成比率：177 人（約 18%）

(4)「ひとり親家庭② ～ダブルワークで働いても、貧困線ギリギリでこの先が心配～」

<家族の概況>

- ・ 給付金を受け取ったのは中学校を卒業した子ども（16 歳）。
- ・ ひとり親で母子家庭。地方に在住。保護者は 44 歳。
- ・ 子どもは給付金を受け取った子どもだけで、一人っ子。
- ・ 子どもは保護者が 28 歳のときに生まれた。
- ・ 給付金は最低限の手続きで済んだことも助かった。



<経済的な状況（「貧」軸）>

- ・ 仕事は派遣と非正規でダブルワークをしている。
- ・ 働いている時間が長い。1 ヶ月の手取りは 105,000 円程度。
- ・ 手当は児童扶養手当のみ。養育費はない。

児童扶養手当：4 ヶ月に 1 回、約 172,000 円（月額約 43,000 円、4 月・8 月・12 月に支給）

→ 仕事で年間 1,260,000 円程度、児童扶養手当 516,000 円、年収合計 1,776,000 円

（2 人家族の貧困線は約 1,720,000 円で、わずかに貧困線を上回っている状態）

- ・ 家庭の貯金は、50 万近くわずかにあるが、コツコツ万が一や将来のために貯めてきた。
- ・ 子どもが中学生になる頃から経済的に厳しい状態が続いている。

<困りごと、悩んでいること（「困」軸）>

- ・ 入学時の他の支援制度は利用してみたかったが条件を満たしていなかった。
- ・ 部活動や学校行事、お祝い、社会体験の機会は何とかさせてあげることができた。
- ・ 制服や教科書、参考書など学校で揃えるものは十分には揃えることができなかった。
- ・ 子どもはだいぶ大きくなり、体験の機会や放課後・夜間への支援ニーズはそこまでない。
- ・ 頑張って働きながら子育てしてきたが、無理せず安定して働ける労働環境がほしい。

児童手当は中学卒業で終わり、高校を卒業すると児童扶養手当が終了してしまいます。非正規の派遣社員のためいつ首切りになるかわかりません。これから先が心配。仕事安定している正規社員にはなかなかないと思います。安定して働ける仕事が少ないと思います。仕事で休めない時など家のこと（食事、掃除）を安価でしてくれるシステムがあればいい。

高校に入学する時はもちろん、修学旅行など、卒業するまでにかかるお金はたくさんかかります。ギリギリで対象外となってしまう、給付の支援制度は使えませんでした。

いろんな資金貸付金などあっても連帯保証人が必要だったり、貸付の可否決定までに時間が掛かる。平日、仕事があるため土・日の手続きが出来たり、決定までの時間が短くなってほしい。役所に相談には行くが申し込みはできないまま帰ってくる人が多いです。市の支援制度を使えると思ってたのに、時期的に使えないということでした。時期にかかわらず、状況で判断してほしいです。

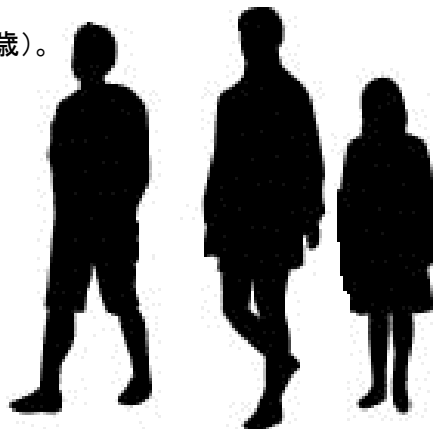
子ども本人は大学進学を希望していますが、お金の面でとても心配です。進学先も、まず費用を考えてしまいます。本人も自分の進学にお金がかかる事を気にして申し訳ない気持ちを持っています。就職も考えてもらえないかと少し子どもに話をしました。とても悲しいです。その後の生活を考えると今もとても不安なのです。＜アンケート自由記述より＞

構成比率：89 人（約 9%）

(5)「生活保護家庭 ～体調が良くなく働けない母親、支援へのニーズも高い～」

<家族の概況>

- ・ 給付金を受け取ったのは中学校を卒業した子ども（16 歳）。
- ・ ひとり親で母子家庭。地方に在住。保護者は 42 歳。
- ・ 給付金を受け取った子どもの下に中 2 の子どもがいる。
- ・ 第一子は保護者が 26 歳のときに生まれた。
- ・ 給付金は返さなくていいことがありがたかった。
- ・ 使い道が限られていなかったことも助かった。
- ・ 不安の気持ちが減って、気持ちが楽になった。



<経済的な状況（「貧」軸）>

- ・ 健康状態は良くない。働くことのできる状態ではない。
- ・ 生活保護を 6 年くらい利用している。生活保護は月に 110,000 円程度。
- ・ 手当は児童手当と児童扶養手当（手当の分、生活保護費は少なくなっている）。
児童手当：4 ヶ月に 1 回、40,000 円（月額 10,000 円、2 月・6 月・10 月に支給）
児童扶養手当：4 ヶ月に 1 回、約 212,000 円（月額約 53,000 円、4 月・8 月・12 月に支給）
→生活保護で年間 1,320,000 円程度、児童手当 120,000 円、児童扶養手当 636,000 円
年収合計 2,076,000 円（3 人家族の貧困線は約 2,110,000 円）
- ・ 家庭の貯金はない。
- ・ 子どもが乳幼児の頃から経済的に厳しい状態が続いている。

<困りごと、悩んでいること（「困」軸）>

- ・ 他のパターンと比べて全体的に今まで経済的な理由であきらめたことが多い。
- ・ そのなかでも、海水浴やキャンプなどの体験、部活動、お祝いのあきらめ具合が高い。
- ・ 過去の職場や地域など周りとの関係も他のパターンと比べて全体的に「悪い」傾向。
- ・ 今までに就学援助と学習支援は利用したことがある。
- ・ 改善や充実してほしい制度も全体的にかなり高い。

子どものうち 1 人は障害を抱えていて、私自身にも精神的な障害があり、生活保護で暮らしています。

もう少し相談しやすい機関や使いやすい支援制度が増えたら良いと思います。また、子どもが学びたい、友人と一緒に習いたいと言っても、同じところに参加させることが出来ない。生活に困った家庭の子どもには安くなったり無料になるシステムがあっても良いと思います。新しい支援も出来つつあるようですが、まだまだ届いていないし、体調が悪い親で、子どもが自分で通えないと参加出来ないようなうちの家庭では車もないし、近くにないと、どこかにあっても子どもは利用することができません。

体調などを気にしながら今、仕事も探しそうとしているので無理せず働くことのできる労働環境も本当に増えてくれると助かります。短時間、土・日・祝（休み）で、子どもの障害や風邪などの病気、私自身の病院通院の時などの休みがちゃんと確保してくれる職場を探してます。でも、なかなか見つけることができません。＜アンケート自由記述より＞

構成比率：65 人（約 7%）

(6) その他のパターン

<高校を卒業した子どものいる家庭①> 構成比率 112 人 (約 12%)

子どもは高校等を卒業 (19 歳)。給付金は新生活関係 (引っ越しや生活用品など) にも使った。給付金は返さなくて良いことがありがたかった。お金以外にも応援してくれている人がいることを知り、励まされた。他の支援制度は利用したかったが、条件を満たしていなかった。

家庭全体で勤労月収は 1 ヶ月で 95,000 円程度。そのうち 13,000 円は子どもが働いた収入からもらっている。貯金は 50 万円近くわずかにある。今まで経済的な理由で希望する進学・就職をあきらめたことがある。教育や進学にかかる費用を減らしてほしいと思っている。困ったときに気軽に相談できる相手や支援者が増えてほしい。学習支援や社会体験などへのニーズは低い。

<高校などを卒業した子どものいる家庭②> 構成比率 37 人 (約 4%)

子どもは高校等を卒業 (19 歳)。給付金は新生活関係 (引っ越しや生活用品など) にも使った。給付金は新生活の前にもらえたことも助かった。お金以外にも応援してくれている人がいることを知り、励まされた。卒業にあたって他の支援制度は利用したかったが、使いづらかった。

家庭には給付金を受け取った子ども以外にも子どもがいる。家庭全体で勤労月収は 1 ヶ月で 116,000 円程度。そのうち 11,000 円は子どもが働いた収入からもらっている。児童扶養手当、養育費をもらっている。貯金はほとんどない状態。今まで経済的な理由で希望する進学・就職をあきらめたことがある。安心して暮らすことのできる経済的な福祉制度が増えてほしい。困ったときに相談できる相手や支援者に対するニーズは低い。

<父親や祖父母 (母親以外) が子どもを育てている家庭> 構成比率 56 人 (約 6%)

子どもは中学校を卒業 (16 歳)。給付金は使い道が限られていないことも助かった。希望の進路をあきらめずに済んだ。今回、他の支援制度も利用することができた。

現在、年金で暮らしている。改善や充実してほしい支援ニーズは他と比べて全体的に低い。

<祖父、祖母と一緒に暮らしているひとり親家庭> 構成比率 104 人 (約 11%)

子どもは中学校を卒業 (16 歳)。給付金は返さなくて良いことがありがたかった。お金以外にも不安が減り気持ちが楽になった。今回、他の支援制度も利用することができた。

家庭には給付金を受け取った子ども以外にも子どもがいる。祖父母と一緒に暮らしている。働いていて月の手取りは 105,000 円程度。児童手当、児童扶養手当、養育費をもらっている。貯金は 50 万円近くわずかにある。困ったときに相談できる相手や支援者に対するニーズは他の項目と比べて低い。無理せず働くことのできる労働環境がほしいと思っている。

<その他> 構成比率 131 人 (約 14%)

このパターンは大きな特徴付けが難しい。このパターンの結果からは、今回のクラスター分析で 10 パターンとなったが、実際はさらに多様な貧困状態のパターンがあることが想定される。

他のパターンと比べて、このパターンの子どもは高校卒業等が多く、父子家庭も一定割合あり、年金や生活保護を利用して暮らしている割合も一定割合確認することができた。保護者の年齢は比較的高い (平均 51 歳)。就労支援へのニーズは他の項目と比べて高かった。

2、子どもの生活と声の聴き取り（子どもの声聴き取りパイロット調査）

子どもの生活と声 1500 人アンケートでは、直接お会いしてお話をうかがう聴き取りへの協力もあわせてお願いし、324 人（保護者 238 人・子ども 86 人）の協力承諾を得ることができた。そこで、本報告では 2018 年 3 月から 5 月にかけて「子どもの声聴き取りパイロット調査」として保護者 8 人、子ども 3 人の計 11 人にお話をうかがった内容を紹介する。クラスター分析では貧困状態のパターンとその多様性を明らかにすることを試みたが、聴き取りではさらに具体的な生活状況や声に迫った。なお、今後、本格的な聴き取り調査も実施する予定である。

保護者（1）A さんへの聴き取り

- ・九州・沖縄地方在住。給付金を受け取った子どもは小学校に入学。祖母。
- ・パターンは(6)「父親や祖父母（母親以外）が子どもを育てている家庭」に分類。

<給付金の感想について>

一旦、給付金が収入認定されて、3 か月保護費から減額されてしまっていた。自立更生計画書も出していた。給付金で、入学に必要な学用品とか揃えて、生活保護費からは入学してからの体操着や鍵盤ハーモニカなどにあてようとしていた。

子どもを学童保育に入れることにしたが、月に 12,500 円かかる。生活保護費から 5,000 円でも差額の 7,500 円は自己負担だったので、その月謝にあてるということで納得してもらって、ようやく収入認定から除外された。収入認定だったら、あすのばに返すって言って役場とかけあった。

給付金は、近くに子ども食堂をやっている児童館があり、その職員が「こんな制度あるよ」と教えてくれた。「私なんかよりもっと困っている人いるのに」と思ったけど「出してみたら」とすすめられて。役所の人は、あすのばの制度を知らなかった。

<生活の状況について>

A さんは 70 歳近いが、訪問介護の仕事を派遣でしている。他に、年金、生活保護、子どもの手当で生計を成り立たせている。62 歳でヘルパーの資格をとって、その後ずっと同じ会社で働いている。でも、あと 3 年ぐらいしか仕事できないと思っている。

生活保護は「車をつかうな」ということでもめたことがある。仕事に使うから認めてほしいとお願いしたが、「他の人も車は認めてないからそれなら仕事をやめなさい。生活保護で生活できるでしょ」と言われた。「でも、働けるうちは働きたい。70 歳過ぎて働けなくなったら全面的にお世話になるかもしれないから、そのときまでは自分は働く」と言った。

仕事では車がどうしても必要。地域によって軽自動車は認めているところもある。住んでいる地域も車社会だから認めてとお願いしたけど認めてくれなかった。そこで、会社の車だったらいいということになった。それでいま会社の車を使わせてもらっている。時給は他の同じ業種の会社より高く、ありがたい。

孫が 1 歳 7 か月でひきとった。(A さんの) 長男の子どもで、離婚して嫁が引き取ったが、事情が変わり、長男も面倒をみれず、私が引き取ることになった。

いまは学童保育に夕方 5 時半ぐらいまでいる。友だちともとても仲良くやっている。学校まで歩いて 15 分ぐらい。元気に通っている。先生のことも大好き。甘えん坊で、寝るときも「ばば、

こっち見て寝て」と。この子がいるから、自分も活力がでてくる。でも、体力が必要だと思っている。他の市とかでは学童保育が無料になる地域もあり、自分が住んでいる地域と全然ちがう。いまでも月 7,500 円は自己負担で、すごく厳しい。

子どもが中学まではがんばらないと思っている。そのぐらいになれば、自分でなんとかできるかなと。そろそろ「終活」もしないといけないと思っている。月々2千円で互助会の積立に入っておきたいが、生活保護で認めてくれるのかどうか。お葬式代ぐらいは、子どもにも迷惑をかけたくない。

保護者 (2) B さんへの聴き取り

- ・中部地方在住。給付金を受け取った子どもは中学校に入学。母親。
- ・パターンは(3)「ひとり親家庭①～生活保護を利用せず、非正規で働く母親～」に分類。

<給付金の感想について>

給付金は、ほんの少しのお金で生活をしのいでいたときに話があったので、大変助かった。「あしながおじさん」のような感じだと思い、受け取った。給付金は、数年前から母子会に入っているが、その母子会からのメールで知ることができた。

<生活の状況について>

給付金に申し込む前、通勤途中で交通事故に遭った。全身打撲で、救急車を呼んで入院するくらいのケガだったが、入院すると子どもたち二人の面倒をみれなくなるため、救急車は呼ばず、入院もしなかった。ほぼ一ヶ月間は自宅で寝たきりの状態だったが、上の子どもが中学入学を控えていた。仕事は交通事故から9ヶ月間できなくなり、(保護者の)父から50万円も借りて何とかしのいだ。

子どもの中学入学の制服代は、何とか支払うことができた。中学校に入学してから、運動部のユニフォームや用具、シューズ購入代で、予想以上に万単位でお金が出ていくことがわかり不安でいっぱいになった。仕事もできず経済的に不安ばかりが頭をよぎり、3万円の給付金が心強く頼りになった。

ようやく怪我が治り、仕事に復帰できるようになったため、経済的には以前より改善したが、「とにかく日々をこなす」ような毎日で苦しい状況は続いている。離婚して間もないころは元夫からは養育費が送られていたが、次第に送られなくなった。パートをしている時は子どもを見てもらう必要があり、ママ友に預かってもらうこともあったが、やはり気兼ねなくというわけにもいかなく、パートだけでは2人の子どもを養うこともできないため、自営業の仕事を始めた。

自営業の仕事は自分のそばに子どもを置いておけるという利点はあるが、自分が稼がないという義務感からメンタル、身体ともに限界を感じることも多い。交通事故によって自営業の仕事も難しくなってしまったことが一番大変だった。

ママ友ともギブアンドテイクの関係なら良いが、お願いばかりだと気が引けて、こちらから連絡しなくなってしまった。学年が上がるにつれてお金がかかるということを知った。(保護者の)父から借りているお金や自営業の融資の返済も大変。子どもの将来や進路に対して不安で、言うてはいけないと思いつつも進路について口を出してしまう。

離婚していることで、周りから子どもに何か言われることがいやで周囲には伏せているため、相談できるひとが少ない。以前と同じ暮らしをさせてあげたいがどうしてもできないことに直面したときに自分を責めてしまう。

子育て世代への負担が強いと感じる。シングルマザーをしていることをあまり周囲に言えず、両親にも迷惑をかけるわけにいかないため、頼りづらい。社会から孤立しがちなお母さんを、ひとりにしないでほしい。また、普段仕事や家事で忙しく、いろんな制度などの情報を調べる時間もないから、知らないこと、気づかないことが多いので、情報をより入手しやすくしてほしい。

保護者 (3) C さんへの聴き取り

- ・近畿地方在住。給付金を受け取った子どもは中学校に入学と中学校を卒業した2人。母親。
- ・パターンは(6)「祖父、祖母と一緒に暮らしているひとり親家庭」に分類。

<給付金の感想について>

給付金は、いろんな方が応援してくれていると感じられた。制服代で10万円くらいかかると聞いてはいたが、実際にそのくらいの金額だったうえ、きょうだいで中学・高校の入学時期が重なったため単純に負担が倍。本当に大変だと思っていたので、準備に充てることができて助かった。給付金は母子会から紹介されたことがきっかけで知った。返さなくて良いことに魅力を感じた。

<生活の状況について>

高1の子どもは土日も部活に打ち込んでいる。授業料は非課税世帯なので無料だが、部活の遠征費や合宿の費用がその分かかっている。住んでいる自治体では中学校から給食がなくなるので、中1の子どもも今年からお弁当が必要になった。小5の子どももいて、学童でお弁当が必要になるときもあるので、自分の分と合わせて4つ作らないといけないときはかなり大変。

離婚後、元夫からはほとんど養育費が支払われていない。自分の給料だけでは日々の生活がやっとで、塾や習い事には行かせてあげられない。高1の子ども受験当時、学校説明会の記入用紙に通っている塾を書く箇所があった。それくらい家庭にとって、塾に行くことが当たり前になっているんだという現実を見た気がして、教育・学力向上の面では力を入れてあげられていないと感じた。

子どもたちの学力面は心配。母子会でも学習支援を実施しており、学生ボランティアや大人のスタッフたちが勉強を見てくれるが、居場所づくりの意味合いが強いため、学力向上にはつながりにくい。どうしても塾には行かせてあげられず、今の成績では今後大学に進むにあたって貸与型の奨学金を利用するしかない。保育士になりたいという明確な目標があるので応援してあげたいが、子ども本人も「借金してまで大学に行かなくていい」と話している。母も借金するという事に抵抗はあるが、奨学金がないと進学が難しいため悩んでいる。

母子会の子ども食堂や学習支援、外出行事には積極的に参加している。母の仕事の都合上、なかなか子どもと関わる時間を十分に持つことができず、その分、外でいろいろな関係性を作りたいと考えて会に参加した。母自身も行事の企画・運営に関わっている。住んでいる県でも対応が手厚い母子会であることと、様々な行事を実施してくれるので助かっている。

就学援助や、高校の無償化も対象だが、実際に受け取るわけではなく授業料などから差し引か

れているので、あまり支援を利用している実感がない。

子どもの学力向上への支援があればよいのに、と思う。貧困世帯の子どもは学力が低いという統計も出ているので、その事実をもっと重く受け止めてほしい。手当を増やしたり、より学力向上に重点を置いた学習支援の場を行政で整えるなどしてほしい。なぜ貧困世帯の子どもは学力が低いのか？という分析も含めて支援してくれるとよい。

行事のお知らせをもらっても、距離があるとなかなか参加するのは難しい。近場で開催してくれると参加しやすいと感じる。

保護者（4）Dさんへの聴き取り

- ・北海道・東北地方在住。給付金を受け取った子どもは中学校を卒業。母親。
- ・パターンは(2)「貧困状態が連鎖している家庭～親が子どもの頃もひとり親家庭で育った～」に分類。

<給付金の感想について>

給付金は、とても助かった。制服に4～5万かかり、くつやジャージなど他にもいろいろ準備するのに15万くらいかった。それらの費用はあすのばの給付金（4万円）と民間の給付一時金（10万円）で何とかした。

入学関係の費用は3月に一式買って、副教材とか柔道着とか5月・6月くらいまでだらだらと色々な支払いが続いた。インターネット上に金額が載っている訳でもないし、見えないというのか分からない。支払いの通知が来るまで「どれぐらいお金を用意しとけばいいんだろう」とときどきしていた。

給付金のことは母子会から電話があって知り、申し込んだ。いろんな使い道や進路でも大丈夫なことは安心した。

<生活の状況について>

現在、子どもは元気に過ごしている。私は一年くらい前に具合が悪くなって仕事を辞めざるを得なくなった。食べていくにも大変な状況になってしまい、テレビでフードバンクについてのニュースを見たが、団体に配るのではなくて個人や家庭に配ってくれる支援はないかと思った。

体調は前みたいに元気な状態に戻らなくなってしまっていて、働きたいという意欲が沸かずにいる。前の半分くらいの状態。体調が良くないのに無理に働こうとして会社に迷惑をかけたくない気持ちになっている。「今日体調が悪くて休ませてください」と電話をして、次の日にも「今日も休ませてください」と言えない。いまは休む時期なんだと思うようにしている。おばあちゃんがいて、よくしてくれて助かっている。

中学校までは給食や児童手当もあったが、手当がなくなり、お弁当や定期代など高校になるとぐっとお金がかかるようになる。通学定期代も結構かかる（月に1万2千円程度）。春休みなどは定期が切れて、学校に行くことがあると1回往復800円くらいかかる。修学旅行はもしかしたら行かないかもしれない。積立は始まっているが、子どももあまり行きたい様子もなく、行きたいとなったときにお金を払えばいいかなと思っている。修学旅行も普通に旅行に行けばもっと安く済むのに、なんであんなにお金がかかるのか。

子どもが生まれたときからいまの住居に住んでいる。17年くらい。いまはスマートフォンの

時代だと思うが、うまく使いこなせず、そういった支援の情報が手に入りづらい。

子どもは、児童養護施設で3ヶ月ほど暮らしたことがある。ある日、親子喧嘩をして次の日学校を休んで2、3日経てば行くと思っていたら一週間行かなくなって、おかしいと思い始めた。すると、夜にゲームセンターなどに行くようになり、私も鬱があることからネガティブに捉えるようになり「このままだと殺しちゃいそう」など悩み、学校の先生に相談して児童相談所を紹介してもらった。児童相談所の人と面談をして「お母さんのためにも、子どものためにも少し離しましょう」となった。

保護者 (5) Eさんへの聴き取り

- ・北海道・東北地方在住。給付金を受け取った子どもは中学校を卒業。母親。
- ・パターンは(4)「ひとり親家庭② ～ダブルワークで働いても、これから先が心配～」に分類。

<給付金の感想について>

給付金は、貯金もなく、本当に困り果てていたので、入学準備にとっても助かった。貯金もする余裕ができないひとり親家庭にとって、なんと心強い制度化と思った。

給付金は返さなくて良いことが良かった。給付金がきっかけであすのばのキャンプにも参加させてもらって子どもは「すごく良かった」と話している。キャンプで仲良くなった同じ年代の子がとても気が合う子ばかりで、話もあうし、境遇的に何でも話せる相手がようやくできたって、ほんとに喜んでいた。

給付金は市の子育て支援の子ども福祉担当の方が、離婚当時からお世話になっていて、「こういうのあるけよ。返さなくていいし、あたるともらえるから少しでも足しにしたら」って言われて「ダメもとでやってみよう」と応募させていただいた。市の福祉の方からの紹介がなかったら、まったく知らなかった。

<生活の状況について>

現在、経済的にとても厳しい。パートで働いているが、お給料もらっても家賃も光熱費もかかり、すべて支払いで消えていく。児童扶養手当が4か月に1回しか入らない。せめて2か月に1回や毎月になるとどれだけ助かるか。子どもが高校卒業で児童扶養手当も終わってしまうので、せめて20歳まで延ばしてほしい。

子どもは進学も考えていたが、お金のこともあり、就職でもいいかなと最近思い始めている。少し助けてもらいたいけど、住んでいる地域では就職できるところも職種もすごく限られている。元夫の祖父が自営業を営んでいるので、その仕事をしたいという思いもあるが、元夫がいるからいやだと悩んでいる。

いま借りている奨学金(50～60万円)は、もし大学などに進学する場合、その場ですべて返すように言われているのもあり、「それだと就職しかないよね」と進学は厳しいと考えている。

部活は、文化部だがとても大変。運動部よりきつい。週末に合宿や合同練習もある。休みがない。学校から帰ってきて食べて寝る生活が続いた。

私は都市部で生まれて育った。結婚してこっちに来了。離婚して、元夫の実家と疎遠になるかと思っていたが、祖父母が両手拵げて子どもたちに「来い」って言ってきて、金銭的に私が困

っていることをわかっていて何度もお金を貸してもらった。お金を返そうとしたら「孫のことなんだからいい」と受け取ってくれなかった。祖父母には、足を向けて眠れないほど感謝している。いまでもずっと私を含めて大切にしてもらっている。

一方で、離婚当時、住んでいる地域から「出でいけ」と元夫に言われた。貯金もなく、もう一人の子どもに障害があることから離れることができなかった。離婚後、最初は生活保護を受けていたが、車を持ってはいけないうのに、子どもが都市部の病院に通院しなくてはならず、電車とバスを乗り継いで1日がかりでヘトヘトになり交通費も大変だった。

保護者 (6) F さんへの聴き取り

- ・九州・沖縄地方在住。給付金を受け取った子どもは中学校を卒業。母親。
- ・パターンは(6)「祖父、祖母と一緒に暮らしているひとり親家庭」に分類。

<給付金の感想について>

入学準備で貯金もなく、不安でたまらなかったが、給付金で最低限の準備ができ、無事に入学できて本当に感謝している。制服や学用品を買うことができた。

資格取得のため生活がいっぱいいっぱいになって、入学する前に資金がどうしても足りなくて、市役所に相談に行った。まずはインターネットで調べて、家賃補助制度が対象にならないか聞いたら、「対象にならない」と。「F さんに対応する制度は他にもない」と。「じゃあどうしたらいいの。家賃払ったら学費は払えない」。

そこで、一時的に生活保護を受けようと相談したら「車を持っているからダメ」と。車を処分したら仕事も生活もできない。そこで、相談員の方が「あすのばっていうのがあるから、自分で調べて」ということで調べて給付金に申し込んだ。結局、公の制度ってないんだと。だから、本当に助かった。

<生活の状況について>

子どもは、定時制の工業高校電気科に通って、12時から夕方5時まで近くのガソリンスタンドでバイトして、そこから学校に行って、夜10時ごろに帰ってくる。自分で給食費も全部払ってくれている。通学は、最近バイクの免許をとったが、それまではバスで通学していた。学校まで往復800円ぐらいかかる。全日制だったら弁当代もバス代も、バイトも十分できず大変だと思う。学校は、楽しいみたいで、資格もとれるし、運動部に入っている。もう一人の子どもは、現在は中学生で商業高校に進学したいと考えている様子。

私は、3年間通信で専門学校に通い、この春卒業して資格もとった。なので、仕事の幅も広がり収入も増えたらなと思っている。週5日働き、週2日は自宅で仕事をしている。休みはない。以前は違う仕事をしていたが、ひどい長時間労働だったので辞めることになった。そこで、専門学校に通って資格をとろうと通ったが、その間、収入は大幅に減った。

通信の専門学校の授業料は100万円近く。両親に借りた。ひとり親家庭向けの支援制度を調べたが、通信制は適用外とのことだった。全日制なら対象になるとのことだが、働かなきゃ生活ができないから全日制には通えない。資格をとってレベルアップしたいし収入も増やしたいのに。通信制も対象にしてほしいと本当に思った。

一番困っているのは、経済的なこと。子どもの学区に市営住宅がないので、公営住宅に引っ越したら転校しないといけない。しかし、今は月 5 万 5 千円で家賃の負担が大きい。バスの学割がない地域で、通学の割引制度があれば助かる。

もう一人の子ども本人はなりたいた職業があるが、その場合は専門学校進学になる。でも授業料は年間 100 万円ぐらいかかる。現状 100 万円を貯めることなんてできないし、だからといってあきらめてというのは心が痛い。児童扶養手当は、もう一人の子どもが高校卒業で終わるが、全部なくなるのは厳しい。専門学校に行くとなったら恐ろしい。いまは考えないようにしている。

保護者（7）G さんへの聴き取り

- ・中部地方在住。給付金を受け取った子どもは中学校を卒業。母親。
- ・パターンは子ども票から聴き取りに至ったため分類されていない。

<給付金の感想について>

給付金は離婚が成立して間もなかったので、大変助かった。返さなくて良いことや使い道が限られていないことが良かった。支えてくれる人がいるんだと思えたことで、「私が頑張らないといけないと思っていた気持ち」が少し楽になった。

給付金を知ったきっかけは、費用がかかるので新聞を止めていたが、子どもが受験で勉強のプラスになると思い、年末の一ヶ月間だけ新聞を購読していたこと。新聞の記事がたまたま目にとまり、読んだところ「入学・新生活応援給付金」募集の掲載があり、自分も該当していて給付型の制度だったので急いで応募した。

<生活の状況について>

子どもは学校の寮で生活をし始めて、もう一人の子どもと 2 人で生活をしている。現在、高齢者施設のケアマネージャーとして働いている。家にいる時間を増やしながらも、経済的には少しずつでも収入が増えるよう、職場や仕事内容を考え、資格などを取得して歩もうとしている。仕事と家事で精一杯で、夕食後にテレビを少し見るぐらいの時間しかない。聴き取りはたまたま休みだったので、話をすることができた。

結婚した当初は、自宅で学習塾を開いていた。当時は元夫が働き、G さんも自宅で働いて収入があった。しかし、元夫が精神疾患を患い、睡眠薬とアルコールの影響で会社に出勤できなくなり、会社を辞める過程で徐々に収入が減ってきた。元夫が家を出てところで、家庭の収入は G さん一人の肩にかかるようになった。学習塾を辞めて、介護の仕事に就き収入を得るようになった。子どもは高校進学を迎え、もう一人の子どもは中学生になり、費用がかかるようになった。

子どもに離婚する前と同じ暮らしをさせてあげたいという思いから、離婚についてあまり詳しく話していないが、周りからうわさが流れ、なんとなく子どもも理解しているようで、複雑な思いがある。特に現在中学生の子どもは、以前は明るく活発だったのに、離婚してから暗くなってしまったことをとても気にしている。

経済的には、弟もいるので、今回、給付金を受け取った子どもには高校を卒業したら就職してほしいと思っている。就職が有利な公立で工業系の高専に進学してもらった。子どもは学校の寮で生活しているが、就職のことを考えると車の免許を取る必要がある。成人式には、振袖も着せ

てやりたいので、今後一層お金のかかることが心配。

家の実情を話して、相談できる人が身近にいない。離婚したことにより、子どもたちに辛い思いや母親だけでは「普通」のことをしてやれないことが申し訳ないといつも思っている。奨学金を借りているが、返済は母親である自分が行わないといけないと考えている。

給付型の支援制度が広がることを期待している。住んでいる地域が田舎の方で、これまでの生活状況を近所の人知っているので、なかなか本音で話をする相手がいないため、そういった話ができる場や環境ができると精神的にも楽になると思う。

保護者（8）Hさんへの聴き取り

- ・北海道・東北地方在住。給付金を受け取った子どもは高校を卒業。母親。
- ・パターンは(6)「高校などを卒業した子どものいる家庭②」に分類されている。

<給付金の感想について>

給付金は、入社式のためにスーツを購入。返さなくて良いところに魅力を感じた。給付金のこととは5～6年ほど担当してくれている生活保護のケースワーカーから教えてもらった。

<生活の状況について>

社会人になった子どもは一人暮らしをしている。住んでいるアパートは同じだが別の部屋。子どもの部活に掛かっていた費用が無くなったので生活は大分楽になった。今、生活保護は医療扶助のみ受給し、仕事（週4日、1日7時間の飲食業）の収入で生活している。

DVが原因で離婚。DVから逃れるため母子寮で暮らしていた。3年前に母子生活支援施設を退寮して、アパートで暮らしている。大人の男性が怖いので現在の自宅に男性を入れたことがない。

高校で運動部の費用（遠征費代、宿泊代など）がかかり生活費の工面に苦慮した。死ぬことも考えた。生活費20万の内、10万円が部活動の費用で必要だった。母子家庭だから部活を我慢させるとするのは納得できないので、続けさせて良かった。

子どもは鉄道が好きで、鉄道の専門学校への進学を志望していたが、今の家計状況では難しいため、「ごめんなさい」と伝えて妥協してもらった。他にも高校の入学時など節目のときにお金の特にかかり大変だった。貯金がなく、保険も入っていないため、なにかあった時に対応できない。

精神的な病気を持っている。以前はずっと引きこもりがちだった。仕事のために車を利用しているが、生活保護で申請から認めてもらえるまで2～3年かかった。仕事が好きなので、体調など配慮してもらいながら仕事を続けて13年になる。養育費はもらっている。

東日本大震災で被災した経験がある。そのときは母子生活支援施設で生活をしていましたが、寮が古かったため窓ガラスが多く割れてしまったにもかかわらず、避難する場所が無いため、そのまま暮らしていた。避難所にはおにぎりなどが配られたが、施設は自分たちで賄えるだろうと判断されて支援がなかった。

急を要するときに融資してくれる制度があると、いざという時に助かる。生活保護を利用していると貯金ができないため、積立金として毎月一定額支払い、入学のときなどに祝い金として戻ってくる制度があると良いと思う。

子ども（1）Iさんへの聴き取り

- ・北海道・東北地方在住。2017年春に中学校を卒業。女性。
- ・保護者（5）Eさん＜P28＞の子どもにあたる。

<給付金の感想について>

母親の稼ぎだけでは大変だったので助かった。制服は姉のお下がりがあったので、給付金は教科書に使った。給付金は、もらえることが決まってから母親から伝えられた。母親は、福祉の方から教えてもらった。

<生活の状況について>

現在は、部活動で忙しい学生生活を送っている。上級生は自分しかいないため、新年度からは部活動の役職も務めることに。部活の交通費が大変。練習会場への往復で2,000円もかかることもある。他にも、学校のいろんな費用にお金がかかり、大変。

学校は、中学の時と比べて課題が増えたため、夜遅くまで起きていることが増えた。中学までクラスに一人は仲の良い子がいたが、高校ではバラバラになってしまい、友だちをつくるのに苦労した。中学校3年間と高校1年生の時は、姉や家の事情を知っている先生が担任に着いてくれたので、相談に乗ってもらっていた。今の担任は事情を知らないため、これから話すつもり。

保健室の先生も事情を知っているので、相談に乗ってもらっている。大人にしか相談できないのが辛い。同級生に話したいという思いが募っている時に夏の合宿に参加した。

両親が離婚する小6の春まで祖父（父方）の家に住んでいた。両親の離婚については現実感をもてず、姉の病気のことが気にかかっていた。両親が離婚するときは、誰にも話したくないと思い、気持ちが暗くなった。その当時の担任や幼馴染には離婚のことを少し話していた。

食料があまり無いときにお金が無くて買えないということが結構あった。中学校では美術部に入っていたが、画材をお金が無くて買うことを諦めた。買えなかったときは仕方ないと思った。

気がついたときには、仕方ないという風に捉えるようになっていた。姉とは一緒にバカなことをしたり、先生みたいな存在。祖父の家から出たときは、姉も一緒に暮らしていたが、姉は病気で学校に行けなくなったため、都市部の施設に入って通学。卒業後も都市部で仕事をしている。

部活動のイベントが増えていて、交通費の出費が増えている。年3回の大きなイベントの時にしか学校からは交通費を出してもらえない。

現在、奨学金を借りて学校に通っている。進路については、専門学校への進学に関心があるが、家計を助けるために就職も考えている。経済的に困っているとき、定期的に給付型で支援をもらえる制度があるとありがたい。あすのばに関わって、人を支える仕事に就いてみたいという思いも出てきた。

子ども（2）Jさんへの聴き取り

- ・中部地方在住。2017年春に中学校を卒業。女性。
- ・保護者（7）Gさん＜P30＞の子どもにあたる。

＜給付金の感想について＞

母親から、弟のことも考えると高校を卒業したら就職してほしいと言われていたので、就職が有利な工業系の高専（5年制）への進学を考えるようになり、返済義務のない「入学・新生活応援給付金」に母親が応募していた。

給付金を受けたことで、学校の友人があすのばの合宿に参加することを知り、自分も一緒に参加した。給付金を受けたことで、合宿の存在を知った。合宿には、自分から積極的に参加したわけではなかったが、参加して良かった。給付金は、母親が新聞を見て、「入学・新生活応援給付金募集」の記事をたまたま目にとまり、応募してくれた。

給付金は、返済の必要がなかったことが良かった。また、何に使っても良く自由度が高かったので助かった。

＜生活の状況について＞

高専入学後は、自宅から通えない距離ではないが時間と親の送り迎えが必要となるので、学校の寮に入った。寮は学校の敷地内にあり、1年生から5年生までが在寮している。食事は、朝・昼・夕食の3食とも寮で食べるため、昼食も寮に戻って食べなければならない。他の生徒と昼食を共にすることができないのが、最初は辛かった。寮生活は、お風呂のお湯入れなどの当番があるときは、部活があっても戻って行わなければならないので、慣れるまでは大変だった。

就職や進学のこと、先輩の様子を見ることや聞く機会が、寮では身近にあるので、参考になっている。ただ、自分に置き換えるとプレッシャーになっている。勉強はついていくのが大変な科目もある。

母親からは、高校受験にあたっては、卒業後、就職することを考え就職に有利な学校選択を進められ、Jさん本人もその意向で受験し、合格した。進学して、当初は就職と考えていたが、自分のやりたい専攻とは違う学科だったこともあり、悩むようになった。進路も先輩たちの進学、就職などの選択を身近で見聞きすることで、考え始めるようになってきた。経済事情も相談しながら、適切な進路指導が学校であれば良いのだが、そうでなければ就職するにしても進む先が見えない。現在は、奨学金を借りて学校に通っている。

子ども (3) Kさんへの聴き取り

- ・近畿地方在住。2017 年春に高校を卒業。男性。
- ・児童養護施設で育ち、社会的養護を経験したことがある。

<給付金の感想について>

給付金は、施設からの引越し資金として使わせてもらった。入学金と授業料は奨学金とアルバイトでまかなえたが、学費でほぼ貯金がなくなったので助かった。給付金のことは暮らしていた児童養護施設の職員から紹介してもらった。

退所にあたり、いろいろな奨学金や支援金を調べていた中で、頼れるものは何でも頼らせてもらいたいと思っていた。

<生活の状況について>

現在は、施設を退所して一人暮らしをしている。大学に通い、勉強に励んでいる。幼稚園の先生や保育士を目指す課程だが、小学校の教員免許も取る必要があり、講義とアルバイトで毎日忙しく過ごしている。

高校生のころから現在までずっと飲食店でアルバイトを続けている。施設を退所するときに同じチェーンの別店舗に異動させてもらい、もうベテラン扱いされるようになった。週 4~5 日シフトに入っていて、一人で任されることも頻繁にある。大変だが、今しかできない経験だと考えている。

児童養護施設には虐待で中学入学と同時に施設に入所した。小学校のころから荒れていて、地域では悪い方に名前が知れ渡ってしまっていた。一時保護所にも何度か入ったことがあるが、そこでも暴れて職員にけがをさせてしまったりした。持病があり、あまり外に出してもらえなかった。外に出て自由になりたいという思いもあって、一時保護所での暴力も激しく出てしまったと感じている。

児童養護施設に入ったあとは職員や地域の人、様々な境遇で育つ同じ施設の友達との出会いもあり、徐々に落ち着いていった。高校も、暮らしていた施設から何人か進学した実績もあり比較的理解のある学校だったので、退所後の生活に向けて早い時期からアルバイトを始めていた。

昨年に持病の関係で一時期入院しており、その時期はアルバイトもできない、授業もどんどん進んでいくので困ったなと感じた。入院以外は「何とかなる」が信条なので、本当につらい・困ったと思ったことはそれほどない。

地域の児童養護施設出身者対象の給付型奨学金と国の貸与奨学金を併用し、月 10 万円程度の奨学金を受け取っている。社会福祉協議会が行っている家賃補助の制度も利用している。入学にあたっては、ボランティアに参加すると受け取ることができる給付金などいくつか併用して申込み、利用した。金銭的な支援は得られないが、家族ともつながっている。

奨学金制度の充実や学費負担の軽減について「あったらいいな」とは思うが、ないからと言ってその状況に負けたくないという思いもある。仕事として子どもたちに関わる事はもちろんだが、自分と同じように施設にいたことがある人、自分よりもっと大変な経験をしてきた人など、いろんな人と会って話をする機会を作りたい。

3、自由記述欄（抜粋）

給付金を受け取った子どもたちの声

給付金をいただきありがとうございました。
色々な助成金の申し込みをしましたが、
どれも合格しませんでした。
給付金をもらえて嬉しかったです。

たすけてと
言いたいとき
もある

父が仕事ができないため生活がギリギリです
たすけてください

TEL



父のしゅうかい年金だけの生活です（月10万円）

給付金を受け取った子どもたちの声

給付金、ありがとうございます。
自分は、野球部のマネージャーを勤めていました。
けれど、母子家庭ということもあり、下には2人姉と弟がいることもあり、
部活動をやめざるを得ない状況になりました。
まだ、辞めるか迷ってたんですけど、
辞めようと思っていました。
母子家庭で、こんな生活で、苦しくて。
父親が、いい人間で、こんな生活で、初めて気づきました。
母は、毎日、死ぬまで働いて、朝もお昼のお弁当も夜ご飯も作っていて、
初めて、母の、ありがとう、に気が付きました。
感謝するところ、大層と部活で言い聞かされて。
そのことが、やっと分かりました。
しかた、家庭を守る、と言うことは、
私も大にがんばらなきゃいけない。
給付金のおかげで、学校に入りました。
とても感謝しています。
そして、もし、部活動をやめたら、家族のことを助けて、という思いです。
あと、母が、喜んでいました！
本当にありがとうございます！！

給付金のおかげで入学の準備の助けになりました。本当に助かりました。
ありがとうございます！
でも今、学費などで奨学金を借りているが、それでも少し不安がある。
↓
足りるか
今でも奨学金だけでは不足しているため、きちんと学費や他にかかる費用など
4年間払えるかが不安がある。

この給付金をもらったおかげで、進学に必要なパソコンを購入
することができました。もし、この存在を知らなかったら、
本当にありがとうございます。

自転車、毎日使っています。ありがとう

給付金を受け取った子どもたちの声

高校生になると大体ほとんどの人はみんなスマートフォンを持っているので、本を買う
事ができると嬉しかったです。また、家庭生活が厳しいのは友達に
言えないし、あまり知りたくもないので、この国に支援して下さる団体が
あることがとても心強く嬉しいです。本当にありがとうございます。
毎日楽しい高校生活を送る事ができています。

僕は、今年の春卒業して、春にあずのば様から、大変大事な、入学・新生活
応援金をもらい、そのお金で、運転免許取得のため、貯金をし、自動車学校
の入学金に大切に使用させて頂きます。
このような、入学・新生活応援給付金は、僕には、非常に役に立っていて、助か
っています。
僕のような身内がいない人には、助かりました。

中学校より高校がめっちゃ楽しい。
色々な事をリセットして初められた高校は自分の人生の中の宝物になりそうであ
る。大人の階段をよる事がこんなにも複雑な気持ちになるなんて。
小さい頃にはわかりませんでした。
親がいる、家に帰ったらごはんを食べて、一言でもテレビをみる。
でも、年が経つと分かる。大人って、家に帰る時間が短くなって、あそび時間が
今まで一言にいた時間があつた感じがなくなりました。
でも、それが私にとってとても良かったです。
これから大人になって、色々な経験をして、~~自分~~^{自分}も事もたくさんあると思うけど。
でも、家族がいるから、1人じゃないから、これから頑張っていこうです。
結構自由に書きました...笑
誰かの支えが自分にとって人生を良くしてくれました。本当にありがとう...でした。

給付金を受け取った保護者たちの声

卒業・入学時には、思いやらないお金が必要になるので、できだけ
子どもに普通にしてもらいたいと思います。なので、あすのばさんより
支援して頂き とても感謝、うれしかったです。ありがとうございます。

あすのばさんは、たまたま知れて申し込みも出来たのですか？ ほかに
どんな支援があるのか わからなかったの？ みんなで支え合える
ようになればいいなあと思います。

来年は、長女が中学校入学なので、

制服や運動着、スクールバックなど...

沢山 そろえる物があり、今からとても不安に感じています。

給付金とても助かりました。

ありがとうございます。

入学(中学)では、制服や運動着、Yシャツなど、最初に準備しなければ
いけない物がたくさんあり、10万 ちょとかかりました。

でも、あすのばの給付金のおかげで、心配や不安、イライラなどせず、
準備することができ、本当に感謝しております。

今回、給付金をとても有意義に使わせて頂き、ありがとうございます。
アンケートにも記入しましたが、学用品を新しくした際、「自分で選ぶ」
事を大変喜んでおりました。取心しながら、いつも値引き品や
おさがりなどで済ませていたのが、本人もとてもうれしかったです。

給付金を受け取った保護者たちの声

子供にスマートフォンを買う事が出来ました。
ありがとうございます。

高校受験、入学にかかる支出が多く不安な時期だった。
給付金のおかげで、入学をバカら喜べるようになったと感じた。
入学＝不安にならず良かった。
高校はすごく楽しいと子供が話している。
必要な物をそろえてあげられ良かったです。

中学校 入学にかかるお金がたりなく、困っていたので給付金がか
うけられとても助かりました。
でも、入学してから、部活動などの、Tシャツとかウィンドブレーカーなど
買うのに、お金がけっこうかかるといって、大変です。1人だけ買わないわけ
には、いかないのよ。(ちなみに部活動はサッカーです。)
急な出費があると大変ですね。

給付金を受け取った保護者たちの声

「あすのば」の 皆様。

地元の新聞の言で「あすのば」様の活動を知り、
まず思ったのが「うそでは？」でした。

保証人も返済も必要無し。信じられませんでした。
そして、本当に支給され、どれだけありがたいかが、
本当にありがとうございました。

NPO 法人が、やっている学習支援に行っていた見子のあかげで
今回の給付金の事を知りました。

返済不要ということで、高校入学の費用に困っていたため、とても
助かりました。

給付金を支給してくいただき、どうもありがとうございました。
公立中学校であるにもかかわらず、制服が高額であるため、制服の購入
には当てられませんでしたが、おかげさまで義務化されている部活動
の費用の一部（スパイク、ユニフォーム等の購入）に当てさせていただけ
ました。現在、さいたま市内の公立中学校は、部活動への加入・参加
が義務付けられているにもかかわらず、月々部費を払わなければ
活動も続けることができません。

特に、バドミントン部（シャトル代が高い）、野球部、剣道部（用具代
が高い）など、課外活動であるにもかかわらず、かなり高額の活動
費が必要です。そのため、親の収入が少ないと、入れる部も
自ずと制限されてきます。

給付金を受け取った保護者たちの声

手続きが「簡単で」、とてもたあかりました。
ありがとう「さ」いました。

市役所のケースワーカーに説明をいられ、なかなか
理解、賛成して頂けなかったのが残念です
今回のような給付金 本当は助かりました。有難うございました。

あやぶ引越すタイミングで 父親からの給付金のことでも申し込
めさせていたいただきました。自転車操業的な経済状況
でしたので、すぐ有難く 精神的な支えにできました。
給付金を頂くことで

おかげで毎時よりたいぶ改善にきております。

ただ、もっと家族げにようにしていただければ。そうは、た
くにはぜひ思返りをさせていたいただきたいと思っております。
この制度をぜひ続けたいと思っています。

他にも多くの声をお預かりしました。ありがとうございます。
(保護者 599 通、子ども 236 通、合計 835 通)

「子どもの生活と声 1500 人アンケート」考察

データベースの意義と「貧」と「困」の精緻化

― 子どもの貧困対策のネクストステージに向けて

（検討会座長）末富 芳 日本大学文理学部教授

内閣府子供の貧困対策に関する有識者会議 委員

あすのば 1500 人アンケートの意義は、3 つある。(1) 生活の困窮度の高い当事者にフォーカスしたデータベースであること。具体的には 2016 年度に「あすのば入学・新生活応援給付金」を届けた住民税非課税世帯・生活保護世帯・社会的養護の経験のある子ども本人と保護者が対象者となっている。(2) アンケート調査（定量分析）だけでなく、インタビュー調査（定性分析）からも、当事者たちの生活の状況を分析していること。(3) これらの手続きにより、当事者たちの「貧」（低所得や貯蓄のなさ）と「困」（生活面での困りごと）が丁寧に精緻化にされていることである。

アンケート調査の単純集計の結果からは、対象世帯の半数以上 (52%) が貯金ゼロ、また子どもの塾・習い事のあきらめ経験が 7 割程度と非常に高いことが、あきらかになっている。困窮度が高い世帯の子どもたちが、塾・習い事をはじめとする様々な体験をあきらめる比率の高さは、都道府県や政令市等で実施されている子どもの貧困に関する自治体調査でも明らかになっている。日本社会における子ども同士を分断しているのが、塾・習い事、海水浴やキャンプを代表とする「体験の格差」である。この「体験の格差」をどのように縮減できるのか、より豊かなアプローチが求められる段階に入りつつあることを示唆するものであろう。

またインタビュー調査からも、アンケート調査からも明らかとなったのは、給付金の使途が学校関係経費（制服、靴、ジャージ、部活動費、通学費等）に使われており、あらためて我が国の学校教育に対する家計の負担の重さが明らかとなった点にある。高校段階では授業料以外の支援制度も充実が期待される。また、義務教育段階でも就学援助制度を「知らなかった」と回答した 170 世帯あり、いっそうの制度周知や学校の教職員等によるアクセス拡大も重要になるであろう。

クラスター分析からは、ひとり親世帯でも子どものライフステージや、就労状況によって多様な世帯やニーズがあること、またとくにふたり親世帯で就労していても厳しい家庭が一定数あることが明らかになっている。現在の国の子供の貧困対策に関する大綱では、ひとり親世帯、生活保護世帯、社会的養護の子どもたちがメインターゲットになっているが、ふたり親であっても困窮度の高いとくに多子世帯への支援策は、今後の国や自治体の子どもの貧困対策に位置付けられていく必要性をエビデンスとしても示したものとなった点で意義がある。

一言で子どもの貧困といっても、多様である。その多様性をどのようにとらえ、丁寧な支援につなげていくかを明らかにし体系化すること、は子どもの貧困対策をネクストステージにつなげていくための重要な手続きである。本報告書は、そうした意味できわめて意義が高いと検討会の座長としても自負するものである。

子どもと保護者の声が教えてくれたこと：社会制度は人と人との肯定的関係を構築できる

直島 克樹 川崎医療福祉大学

こどもを主体とした地域づくりネットワークおかやま代表

今回、本調査の分析と検討会に携わらせて頂き、改めて子どもたちやその保護者から多くのことを学ばせて頂きました。特に、あすのばの実施した給付金が、親子に肯定的な会話や関係を少しかもしれませんがもたらしたことが確認できました。検討会に参加し、ある行政担当者が言っていたことを思い出しました。「この給付金を当事者に紹介した際、初めて両方で肯定的な会話をすることができました」と。そこに私は大きな可能性を見たような気がします。

給食費や部活動費が払えない家庭は家で給食や部活の話を親子ですることは少ないかもしれませんが。学費が払えないために、否定的な進学の話しかできないこともあるでしょう。でも、もし給食費や部活動費が全ての子どもに保障されるものであったら、学費が社会制度として保障されていたら、親子の肯定的な会話を今よりは増やせる可能性があるのではないのでしょうか。このことは子どもの成長にとって小さなことのように感じるかもしれませんが、何より大切なことではないかと思います。

今後、子どもの貧困対策はそれぞれの自治体での取り組みが鍵になってきます。目の前の支援だけでなく、全ての子どもの権利保障を進めていく観点からも対策が進むよう、自分も決意を新たにしました。

対策の見直しや支援によって教育コストのカットは可能じゃないか

中山 真珠 神戸市外国語大学 4 年

特定非営利活動法人地域支援センター

今回のアンケート調査に参加して改めて強く感じたことは、こんなにも貧困問題が人々の生活に影響を与えているにも関わらず、どれくらい困っているのか、どんな生活を送っているのかという「データの裏側にある実態」はやはり視えにくいということです。統計や数値の背景にある暮らしを想像しやすく、いかに視覚化できるかという試みの重要性をアンケート分析のなかで実感しました。

私がアンケートを読んでいるなかで一番関心を持ったのは給付金の使用用途およびその理由ですが、ランドセルや制服、教科書等、新生活を迎えるにあたり必要なコストは膨大であるということがわかる一方、はたしてこれらがすべて必要なのかという点に批判的な観点をもちました。

例えば、聞き取り調査のなかで、ある保護者の方から「学年があがるにつれてどんどん教育にかかるコストが増える」という声を頂きました。成長にあわせ買い替えなければいけない制服や体操服、一度も開いたことのないテキストなど、対策の見直しや支援によって教育コストのカットは可能であると感じています。

社会全体で家計負担と体験格差の関係性を自分事として

柊澤 利也 早稲田大学 大学院教育学研究科 博士後期課程

本調査では、子どもやその保護者の生の声というリアルな形で相対的貧困状態が経済的負担に限らず、心理的負担につながり、それらが「体験の格差」等の子どもの様々な機会を奪うことが明らかになった。家計負担の有無による格差を縮めていくことが必要であろう。

ただし本調査における声は極めて限定的な層のものであることに注意が必要である。つまり、あすのばという社会的資源とつながりを持たない社会的孤立状態の子ども・保護者の声は届いていない。また、「体験格差」等は如何なる子ども・保護者にも当てはまるものでもある。このように考えると、特定の人たちを「かわいそうな人」とするのではなく、社会全体として家計負担と体験格差の関係性を私事としてとらえることが重要なのではないか。

そこへのアプローチが研究者・実践者により一層求められているように思える。それが子どもの貧困対策のネクストステージなのではないだろうか。

子どもが子どもらしくいられる社会のまなざしを

深掘 麻菜香 北海道情報大学 2 年

NPO 法人 Kacotam、漂流教室ボランティア

「たすけて」と大きく枠いっぱい書かれた文字を見たとき、はっと息を飲み込んでしまいました。同時に、無性に泣きたくなりました。こういった形でしか、助けを求めることができないんだと、切なくなりました。

今回、あすのばでは給付金を受け取った方々へアンケートを行なった際、自由記述欄もご回答頂きました。それらを全て読ませていただきましたが、「給付金ありがとうございました」という感謝のメッセージの端々に散りばめられた微かな SOS。これを見逃してはいけない、と身が引き締まる思いでした。一見豊かに見える日本でも、苦しんでいる子どもたちが全国にまだたくさんいます。パソコンや印刷の文字とは違い、手書きだからこそ伝わる、文字に込められた気持ちや想い一つ一つを、この最終報告書から感じ取っていただければ幸いです。

末筆になりますが、子どもたちが周りの人や環境に甘えながら、豊かにのびのびと育つことができる社会になりますように。子どもたちを見つめる社会のまなざしが、今よりもあたたかなものになりますように。

すべての子ども・若者が、自分の人生を、自分で歩めるように

門馬 優 NPO 法人 TEDIC 代表理事

石巻市子ども・子育て会議委員

本調査を踏まえて、改めてすべての子ども・若者が、自分の人生を、自分で歩めるように、私たちに何ができるのかを考えさせられた。

私たち市民一人ひとりが、社会の担い手として、この課題の当事者であるということを自覚することがスタートラインだとすれば、ユニバーサル型・ターゲット型の施策の充実のみならず、市民社会に向けた普及啓発は必要不可欠である。

アンケートの1枚1枚から伝わってくる、一人ひとりの思いがある。「辛い」「しんどい」「消えたい」「寂しい」といった言葉と共に、「頑張りたい」「ありがとう」「前を向きたい」といった言葉が並んでいた意味を私たちはどう捉えるのか。

「大変で、可哀想な、手を差し伸べないといけない、課題を抱えた困った子ども」ではなく、「共に歩む、一緒に社会をつくっていく仲間」として私たちが、社会が向き合えたときに、子どもの貧困対策は一步前進したと言えるのではないかと思う。

中長期的な支援については、まだまだ本質的な整備が必要

(協力) 赤尾 広明 日本アイ・ビー・エム株式会社

今回、私はアンケート結果データ分析のご支援という客観的な立場で本取り組みへ参画させていただいたわけですが、分析を進めて行くうちに問題の深刻さと複雑さを強く感じるようになっていきました。少なくとも一意的な要因で貧困という状態に陥っているわけではない、という事が明確に浮かび上がってきた次第です。

従って、貧困に陥る様々なパターンに応じて、短期的及び中長期的施策を適切に当てはめて行く必要があるという事になるわけなのですが、短期的な施策については、今回のような金銭的支援がある程度カバーしていると考えられる反面、中長期的な支援については、まだまだ本質的な整備が必要、という事も考えられるという分析結果であったと認識しております。特に貧困の連鎖をどう断ち切るのかという点について、具体的な対応をとって行く事が危急の課題ではないかと考えております。

私事になってしまいますが、IBM 社でコンサルタントとして勤務する傍らで大学で教壇に立つ身分として、教育現場でも、その課題に立ち向かう何かができないかを模索して参りたい、と考えております。

子どもの気持ちは身の回りの大人に伝わっていないのではないか

(OB 参加) 三宅 正太 元あすのば子どもサポーター

この数字、言葉を見てみなさんはどう感じたでしょうか。

普段ニュースや記事で流れてくる「子どもの貧困」で語られたり、あるいは実際に会っている「子ども」の実態とどう違ったでしょうか。どう共感できる部分があったでしょうか。

あくまでこれらの数字・言葉は、調査結果として整理され加工された間接的な情報であり、実態の一部しか読み取ることができません。ここから何を読み取るのかは、読んだみなさんのバイアスやフィルター、経験に左右されるのではないかと思います。

確かに今回の調査では、より詳細な貧困の厳しい実態が見えてきました。しかしそれだけでなく、私達が普段考えている以上に、「子どもの気持ちは身の回りの大人に伝わっていないのか」と、考えさせられる調査結果でした。当事者に向ける「かわいそう」「困っている」バイアスがあまりに強すぎて、子どもやその家庭が心から伝えたい気持ちやその声、叫びを聞いて受け止めることがまだまだ足りてないように感じます。

この調査結果が、厳しい状況を再確認するだけにとどまらず、子どもやその家庭の「本当に聞いてほしい声」をきくのに役立ってほしいです。

ひとりひとりの『私は、ここにいるよ。』というメッセージを受け止めて

(調査・研究担当) 村尾 政樹 公益財団法人あすのば 事務局長

札幌市子ども・子育て会議臨時委員

児童扶養手当の拡充や進学一時金、給付型奨学金の創設など、対策法が成立してから5年間、主にひとり親家庭や生活保護家庭、児童養護施設で暮らす子どもへの対策がすすめられてきた。これらひとつひとつの対策推進は歓迎されるべき動きだろう。一方、「極度に困っている家庭や子どもだけが貧困だと思わないで」、「がんばりたくても、あきらめが積み重なってがんばれない人もいる」など子どもや若者たちの切実な声は「来てほしい子どもが来ない」、「意欲のある子どもには」といった“本当の貧困探し”やジャッジメンタルな社会の風潮に対抗しきれずにいた。

「子どもの貧困」という認識の広がりに対し、なかなか理解が深まらず、対策がすすんでも実感が沸きづらい現状は、ひとつとして貧困状態を単一的に捉えていることが要因となり、対象の基準が厳密化された「支援の崖」や、新しい支援ができて対象にならない子どもたちの「新しいあきらめ」をも生み出し、それ自体も深刻な課題になっているといっても過言ではない。その課題に対し、今回の結果は、貧困状態の多様性を量的にも質的にも明らかにすることができた。

ふたり親でも大変な家庭はあるし、両親がいなくて祖父母が育てている家庭もある。多子で大変な家庭もあるし、父子家庭も忘れてはいけない。乳幼児期の頃から大変な家庭もあるし、中高生になってから大変になった家庭もある。施設で育った子どもだけでなく、里親で育った子どももいる。都市部だけでなく、地方にもいる。進学だけでなく、就職した子どももいる。もちろん、抱えている困りごとやしんどさ、ニーズはさらに多様である。実感で語られていたこれらの多様性が、今回の調査でその輪郭や示唆を生み出すことができたのは意義深い。

これは生活の状況と声を伝えてくれた1500人以上の子どもや保護者ひとりひとり小さな力の集合体であり、1/1500ではなく1/1の生きる姿に向き合おうとしてきた結果である。学生世代が『あなたのことを想う人が、ここにいるよ。』とはじめて運動に、『私は、ここにいるよ。』というメッセージが返ってきた。この多様性の発見を忘れてはいけないし、ご協力いただいた人をはじめ、より多くの人々が「良かった」と感じられる次の対策につなげていく責任が私たちにはある。

対策に「特効薬」がないと言われるのは、この多様性の裏返しでもある。貧も困も多様な状態に応じ、さらにきめ細かな対策の推進が必要なことは言うまでもない。加えて、これだけ多様な貧困状態とニーズに対し給付金が「万能薬」だったことは“古くて新しい”発見で、国民全体とくに子育て世代の底上げや再分配や公費負担の議論は本質的な解決へ向けた第一歩だろう。

また、今の子どもにとっての3つの“R”も、彼らの「あたりまえ(Right)」は、その「あたりまえ」が周りとの「つながり(Relationship)」を形成し、さまざまな「おもいで(Recollections)」をつくっている。貧困状態が子どもの権利を奪っている考えから、さらに踏み込み社会で想像力をふくらませ、課題に対する理解へ向けた一助になればと願っている。

子どもの貧困対策は、私たちの新しい明日がどのような形であってほしいかを問い続ける課題である。次のステージへ向かう今、今回出会えたひとりひとりへ「ありがとう」を伝え、これからもともに歩みをすすめたい。

【参考資料】これまでの検討会で話し合われたこと

最終報告に向けて「子どもの生活と声 1500 人アンケート検討会」が全 4 回行われた。報告をまとめるにあたりさまざまな思いや懸念、気づき、疑問がメンバーによって議論された。そこで話し合われた議論が今後の子どもの貧困対策における調査や支援に少しでも役立つのではないかと要旨を以下のとおりまとめた。

第 1 回検討会（2018 年 1 月 16 日 あすのば事務所内）

《調査結果への気づき、疑問、懸念》

- ・「自治体調査では生活困難層とそうではない層で分けられているが、苦しい状況の中にもバリエーションがある」
- ・「労働時間と手取り金額からワーキングプア的な状態も見える」
- ・「意外に相談できる人がいることに驚いた」
- ・「制度の利用状況についても気になる、就学援助の利用率は、現場で働いていても実感がある。利用している世帯としてない世帯の差についてそこに何があるのか」
- ・「女の子は、アルバイトをするだけでも身だしなみとして化粧しなければいけない。男性が思うよりお金もかかるし大変」

《報告書をまとめるにあたって》

- ・「調査自体にどうしてもバイアスがかかってしまうが、苦勞比べをしないことも大切」
- ・「就学一辺倒の支援から、それだけでない多様な進路に光をあてていくことができるか」
- ・「今の子どもたちの『あたりまえ』が、大人や社会にとって『あたりまえ』として見てもらいことが一番しんどい。そのことが伝わるとよい」
- ・「協力してくれた人たちが『協力してよかったな』と思ってもらえる形にしたい」
- ・「どこまで親や子どもへの自己責任論を超えていけるか」
- ・「自由記述も文字だけだと文脈が読めないかもしれない。例えば、『しんどいから助けて』といったように、しんどいだけが伝わることがないよう気をつけてほしい」
- ・「このような状況のなかで生き抜こうとする強いところ、希望感も伝えたい」
- ・「『うちの家庭も厳しいよ』という意見も出てくるかもしれないから、そうではなくて、協力してくれた人だけでなく、みんなにとっての「あたりまえ」をいかにちゃんと保証していくのかというような視点が大切なのではないか」

第2回検討会（2018年2月13日 あすのば事務所内）

《調査結果への気づき、疑問、懸念》

- ・「若年出産や若い人ほど今回の給付金やアンケート回答まで届かず孤立具合が高いということも考えられる」
- ・「そもそもの制度自体の充実、使いやすくしていくことと情報の周知は両輪でやっていかなければいけないことを伝えていく」
- ・「地方自治体の多くは「制度はある」というスタンスだが、実際には使いづらいものもある」
- ・「『制度を使いやすくしていく』、『情報の周知を徹底する』、『制度の穴を新しい制度で埋める』の3本柱が大切」
- ・「一方、「おもいで」をピックアップしすぎてしまうと「かわいそう」という気持ちが前に出してしまうかという懸念もある」
- ・「経済的な理由で『子どもらしさ』が奪われてしまう。大人にならざるを得ない状況があるのではないか。子どもが『子どもらしさ』を奪われることが一番しんどい。子どもが子どもらしく生きられる社会に、子どもでいられる時間が短くなっている」

《報告書をまとめるにあたって》

- ・「自由記述を見ていると、その割合が高いから重要だと必ずしも一致している訳ではないのではないか。例えば「最低限の手続きで申し込める」割合が低いけど自由記述では結構書いてあった。」
- ・「特に改善や充実してほしい支援や制度では「海水浴やキャンプ」などが低いけど、経済的な理由であきらめた割合は高い。一つの考え方としては、そこまで考える余裕がない、優先度が低いのではないか」
- ・「自由記述は手書きだからこそ伝わるものがある」
- ・「『入学・新生活の前・直後にもらえる』ことがどれだけ必要とされているか、その意味がわからない人が多い。そのあたりは丁寧にまとめていく必要がある」
- ・「今までは『初心者運転マーク』で、仲間や体制づくりだったが、これからの5年は本格的に結果が必要。次の5年が終わる対策法成立10年では子どもの貧困対策からさらに次のステージへすすめるようにしたい」

第3回検討会（2018年4月4日 あすのば事務所内）

《調査結果への気づき、疑問、懸念》

- ・「保護者の聞き取り同行した。涙を流しながら、こちらのことも気を使ってくださりながらお話をされた。なんとしても調査結果をきちんと活用したいと思った。」
- ・「聞き取り調査は、もとは政策提言に使うことが目的だったかもしれないが、困窮家庭は孤立しているので、そこに行って話を聞くことができるというのは一つの支え方ではないかとおもう」
- ・「ラベル貼りをすることが目的ではない。改善策までを含めてが調査をするということ」

《報告書をまとめるにあたって》

- ・「聞き取り調査、地域の人、年齢が近い人がいくのは大事。支援情報はお渡しすべき。エンパワメント型を目指すべき」
- ・「子どもたちには、諦めたことを掘り葉掘り聞くのではなく、将来どうしたいか、そのためにどういうサポートが必要なのか、ということを聞いてほしい」
- ・「フェイスシートとの照らし合わせ。矛盾もあるが、それもまた事実」
- ・「今回の調査をデータベースに共有することは可能なのか」
- ・「自治体調査がいっぱいあるので、そういうものと比較していきたい」
- ・「答えてくださった方が嫌な思いをしないことは前提」
- ・「支援を探すときに、どこを探したらいいのかわからないという状況はよく分かる。そういうシステム作りができたらいと思う」
- ・「アンケートの回答もすぐに返ってきたり、追加で回答してくださったり、皆さんなにかを伝えることに協力的だったので、その声をちゃんと届けたいし、ちゃんと聞きたい。」

第4回検討会（2018年6月15日 あすのば事務所内）

《調査結果への気づき、疑問、懸念》

- ・ そもそも「多様性」という言葉が分かりにくい？
- ・ 支援対象は多様だが、支援はまだらになっている。典型的なのがふたり親で多子の家庭
- ・ 制度から溢れ落ちている人がいる、ということが分かった
- ・ インタビュー時に心に残っているのは「役所に行って何かないんですか？」と言われたが何もなくて、あったのがこの給付金だった
- ・ 今回の給付金で、初めて前向きな話ができ、という話が印象的だった
- ・ この調査を今後どう活用できるのかが気になっている
- ・ 普通の調査研究は、政策提言や、研究に繋げるものだが、もっと「実践」として何が出来るのかを考えて行ってもらうのが良いのではないか

《報告書をまとめるにあたって》

- ・ 中間報告の方が分かりやすかったが最終報告で分かりにくくなっているような気がする
- ・ 分かりやすい多様性って何？
- ・ 今後、明らかになったことから具体的な踏み込みを考えていかなければいけない
- ・ 子供たちを支える社会のまなざしがもう少しあたたかくなればいいと思っている
- ・ 政策に訴えるという意味では、この報告書を活用するには、もう一段階加工したい

